

くらしと教育をつなぐ

We



女と男の家庭科新時代

特集 多民族共生社会を生きる

1993 7

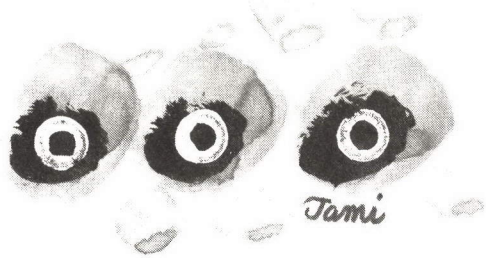


くらしと教育をつなぐ

We

7月号

特集 多民族共生社会を生きる



〈インタビュー〉 シリーズ 男を尋ねる

天野秀徳さん (聞き手 佐々木賢)

「塾はよろず屋」54

連
載

- 地域の暮らしと家庭科教育 石川 尚子40
- 子育てから見える風景 竹中かつみ42
- オホーツクの潮風荒く 江口凡太郎44
- かりん区便り 佐藤 通雅60
- 木を植えた日 蒔田 直子62
- 気のカレンダー 伊野波ひで子64
- 家族のユリイカ 水田 宗子66
- コンニチワ 福祉さん ご在宅? 若竹キミイ69



◆ 読者のひろば70

◆ 編集後記72

インタビュー 複眼とみる

山之内義一郎 さん (聞き手/吉田敦彦)4
 「森のある学校」

特集 多民族共生社会を生きる

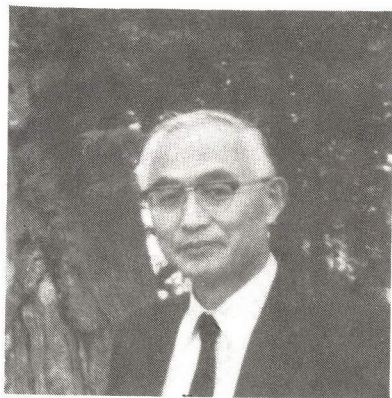
- ☆ 奪われた民族文化をとり戻す 知里むつみ・八幡智子
 (聞き手/石橋満里子)12
- ☆ 多民族共生の教育に向けて 小沢 有作
 (聞き手/石橋満里子)20
- ☆ 国際教室を訪ねて 石橋満里子24
- ☆ 異文化から見れば 谷辺 葉子30
- ☆ アイヌの空 向井 豊昭35
- # ようこそハンディー・ウーマンへ 荻原みどり38

女と男の家庭科新時代

- 家庭科一遊ゆう・惑わく
 一家族をめぐる(1)一 蔵本 佳子46
- MEN'S 家庭科 ...③
 一男たちのセンタク一 中島 清之53

森のある学校

自然環境がないなら、それを創ってみようと、教師も子どもも地域の住民も総出で、校庭に微生物のいっぱいいる土壌を入れ、その地域の自然の植生に添った雑木林をつくる。「森と牧場のある学校」(春秋社)で紹介された新潟県小千谷小学校の実践の「仕掛け人」、元校長の山之内義一郎さんを訪ねた。



プロフィール

1930年、新潟生まれ。新潟大学教育学部卒。県内の小学校校長を五校に互って経験。その間、学校経営改善に関した多数の論文・著作を発表。小千谷小学校の実践のまとめとして『喜びを創る学校—自己発見の喜びが感得できる教育課程の創造—』(めぐみ工房)がある。にいがたホリスティック教育研究会代表。



で
み
る

山之内義一郎さん

(聞き手/まとめ・吉田敦彦)

* 森のある学校

吉田 今日見せていただいた川崎小学校の森は、ダンブカー八十台分の盛り土に八十一種、四百十二本の樹木が植えられてあるということですが、下校する子どもたちが、校門を出る前に何となくこの森に立ち寄って、その中をぶらぶらしてから帰っていく姿が印象的でした。

山之内 朝も、登校してからすぐに校舎の建物に入らずに、森を散歩してから、という子どももいますね。

吉田 この森ができてからのエピソードの中で、思い出深いものを一つ、二つ、お話しいただけますか。

山之内 そうですね。ここに、詩が一つあります。自分の世話しているヤマツツジになって、自分へ向けて書いた詩ですね。

「D君は、とても乱暴だといわれているそうですね。もうちよつとやさしくすれば乱暴といわれたいんじゃないですか」（笑い）。実際に乱暴な子だったんですけどね。

「ぼくは、早くおとなになりたいです。D君は早くおとなになりたいですか。ぼくはいっぱい仲間がいるから楽しいです」

その、ぼく、っていうのは、ヤマツツジのことです。

森に木がたくさんあるから仲間がいっぱいいる、でもD君自身はさみしい、っていう気持ちが出ていますね。

「D君はいっぱい友だちがいますか。ぼくはいつも川崎小学校を見守っているから安心していいよ」って、行ったり来たりしています。

森から自分を見直しているっていうかね。一見あんな暴れん坊の、友だち泣かすような子が、手紙として書くこんなことを。教師にとつても大発見で、そうすると、この子を受け入れられるようになるんですね、なるほどねって。現れた姿とその奥にある姿を見えるようになるんです。無意識の世界っていうか、そうさせている背景を、こういう出会いのなかで分かかって来るんですよ。

吉田 そういう自分の奥の世界をとらえるのに、自分で自分を見ているだけでは見えないようなところがありますものね。

山之内 なかなか見えないです。

吉田 それが、木と対話することです。

山之内 そうですね。木と対話することによって、木と一つになつてみることで、自分の姿が見えてくる。

山之内 他にこんな子どももいました。これはえらいこ

とだな、と猛反省したことです。

この森はお金をかけて作ったのだから、小さな木が大きくなるまで、とにかく大事に育てなくちゃならんと思つていたんですね。そこへ、自然に生えてきたいわゆる雑草、屋顔の蔓がからみつきはじめたんで、「困つたな、引っこ抜かないといかん」と言つたんですよ。そしたら、担任の先生が私に、ある作文を見せた。森づくりのときにコマユミの木を植えた子どもなんですが、「屋顔さんがコマユミさんのところに遊びに来て、仲よくしてね」という対話をしてるんですね（笑い）。

実を言うと、私は、コマユミの方は、お金もかけてみんなで植えたから大事なもので、屋顔は自然に生えたもの、コマユミの邪魔をする悪いヤツだと思つていましてね、雑草だと。でも、その子にとっては雑草じゃない、ほんとに大事な自然の一つなんです。いやー、ほんとにね。私にとっては大きなショックでした。

吉田 それで、やっぱり引っこ抜かなかつたのですか。山之内 そうです。

*峠の気づき

吉田 『森と牧場のある学校』を読んだ人たちが驚きます。

校長と担任たちがこんなに力を合わせて、しかも教育委員会や行政側とはきちんと距離を取りながら、ここまで大胆な学校づくりができるなんて、と。ちよつと京阪神の公立学校では、信じられないわけです。そして、一方で、公立学校にもまだ希望をもつてもいいのかもしれない、という気もしてきます。それで、そんなことがなぜできたのか、その秘密を探るヒントというか、先生の原点についてお聞きできたら、と思つているのですが。

山之内 初めて虫亀小学校に校長として着任したときに、一人の子が、私の顔を見るなり、ぱつと柱の陰に身を隠すんです。4、5年生ぐらいだったかな。見てみると、また隠れるんですね。

気になって担任の先生に聞いてみたら、いや、その子は算数と国語ができない子でね、教えても教えてもわからん子なんです、と言うのです。でもね、体育なんかは抜群の力をもつて、なわとび大会なんかでは、6年生をも凌ぐんです、と。その子のことが気になりましたね。どうしたら、その子が、生き生きするのかなと考え続けました。

算数や国語は、高度の抽象能力を要求されるので、抽

象能力に長けていない子にとっては苦手です。本が読めない、計算ができないと、始終叱られて、ある時は残されて、勉強させられて。先生は教えようと思つて一生懸命ですから、こんな学力じや大変だと思つて、やるわけですよ。僻地は、ほとんどが新採用の若い先生ですから、教えるのに本当に一生懸命なんです。

しかし、どうもそれだけではうまくいかんのだな、という思いがしていました。そんな思いをしながら峠を歩き続けていたのですが、そのときにあの「峠の気づき」になるわけです。

吉田 古志村の虫亀部落へ行く峠ですね。

山之内 そう、峠を越えると、すり鉢状になつている虫亀の部落がパアッと目に入ってくるのですが、それに至るまでの山肌は段々畑になっています。ある日、その山肌の風景がいままでとまったく違うように見ええたんですね。新任校長としてこの学校の子どもたちをどうしていったらいいのか、頭を悩ませていたんですけれど、その風景から、何か、はっと気づいたんですね。これだ、と。

山肌に見える段々畑は耕して天に至る風景です。単なる自然の風景にすぎないその風景が、そのとき本当に、

虫亀に住む人たちの人格形成のプロセスのように見えたのです。長い時間をかけて少しずつ耕してきた村人の姿が浮かんできて、その誠実さ、勤勉さ、ものに耐える粘り強さなどは、この村の自然が作り上げてきたのだなということを直観しました。

吉田 自然の中で成長してきた人間の調和的な生き方が、山あいの懐に抱かれた段々畑の風景の中に映し出されているんですね。

山之内 そのときは、理屈を越えて、本質的直観というか、洞察というか、はっとした気づきですよ。そうしたら、柱の陰に隠れたあの子どもも、自然とのふれあい体験をやつていけば、生き生きしてくるんじゃないか、エネルギーがでてくるんじゃないだろうか、ということまで見えてきました。

吉田 同じなんです。もともと持っている、そのへいのちVの力に乗つかればいいと。それを直観して。

山之内 そう、乗つかればいい。私たちが取り組もうとする学校教育も、自然の秩序形成のプロセスに乗つかればいいと。ほんとに、そのときの驚きというか、これだけの自然の勢い、力、そこから培ってきた文化、そ

うものを、一つの驚きとして感じ取ったわけですね。

その後、街中の川崎小学校で森を創るとききの発想も、同じだったんですよ。あつ、森が必要なんだなど。森の、自然の秩序形成機能ということを直観しましたね。

それには、もちろん、自分の幼少体験も関連していますね。森や自然の中で遊び回っていると、自分が、ほんとうに生き生きと甦ってくる体験がありましたから。森づくりのときも、とても興奮しました。

子どもが森とふれあつていく姿をイメージすると、それは、教材としての森にとどまっていなくて、そのイメージがもうグーツと地球まで広がっていくんですね。その予感があったものの、もう子どもたちのほうが先に、もの見事に、それを拓いていくんですよ。だから、先生たちも、おもしろいね、つて自分の能力を出そうとはじめる。とくに、何というか、ハイカラなことを言えないような地味な先生が、眠りから覚めたように一生懸命に参加し始めるんです。先生達も、楽しいと、私が気づいた以上のことをやってのけるわけです。

だから、その、やつぱり、大きいのをいかにして描くか、というか、そこのところだな、と思つて。教育目標

とか言っているのは、非常に小さいことに、的を狭めてしまつていような気がします。

学習指導要領、教育課程の細かいのは、忘れていいよ、つて言うんです。喜びを創る、というのを大目標にして、従来の指導要領であらわす教科群、内容を、そこに入れ込んでしまう。

現場では、編成権（学校で編成すべき教育課程）がありますから、それはできるんですよ。指導要領では、子どもの実態に即しなさい、地域の実態に即しなさい、学校の実態に即しなさい、つて書かれてありますから。吉田 ちゃんと、各学校の現場の実態に即して、学校が自ら具体化せよと。

山之内 それですよ。教科書も、主たる教材だと。ということは、他にもまだいっぱい、子どもが学ぶのに必要な教材があるんだと。そこから、私の大転換がはじまつて、森まで行き着くんですよ。教材に軽重つけるのは、教師の自由裁量ですからね。

虫亀では、そのあと、すぐに地域のお年寄りといろいろ話しましたね。民話の総合学習も、そこから生まれたんです。1年生の女の先生は、最初は、教科書を使わな

いと、読み書きが遅れるから、と言ったけど、いいから、いいからと言って、みんなでおばあさんの昔話を聞く。教室では見たことない子ども真剣な姿に、先生が子どもと一緒にのめり込んでいましたね。

吉田 方言丸だしでしょ。地域の本物の文化の力ですね。全国版の教科書にはない力ですね。

山之内 それに、低学年には、いきなり文字文化中心は無理ですね。急ぎすぎですね。語りの世界がいいですね。おばあさんの話は、おんなじ話でも、何回聞いても面白いって（笑い）。

*地域のエネルギーの感得

吉田 さつき出た土着の力、その地域が長年培ってきた底力のようなものですけど、先生が校長をされた虫亀小学校も小千谷小学校も、先生が調べられた学校の歴史を見てみますと、明治の初め、村の人たちがほんとに手作りで学校をつくっていった話がありますね。この話は、僕らの発想からすると、ほとんどカルチャーショックのような感じなのです。明治政府が学制発布して近代学校をつくっていったのは、富国強兵のために上から押しつけていったというイメージがありますから。

それが、むしろ下から、民衆の方が自分たちの学び場をつくるんだという形で、自前で自分の山の木を切り、ギリギリの生活の中で勤労奉仕して校舎を建て、それを公立校として認めるように行政側に迫っていく話。新潟県では珍しいことではなかったんですね。

山之内 そうですね、多いですね。あの、「米百俵」という話がありますね。あれは長岡の話なんです。幕末の戦争で長岡が負けたとき、窮乏を救うために送られてきた「米百俵」、それを食べてしまうのではなく、子どもに教育に使おうと。

吉田 あ、あれ、ここが舞台だったんですか。学校というのを、与えられたもの、押しつけられたもの、というイメージで捉えているか、自分たちで苦労してつくりだしたものだとか捉えているかで、全然違ってくるんですね。

山之内 そうですね。私の知る限りでは、だいたい、明治の文化の開かれた空気の中で、勉強する機会が得られるということに対する、思いや願っているものがやっぱりとても大きかっただろうな、という気がしてきますね。富国強兵策であるということが見通せて、発言なり行動なりをするのは、相当のインテリだったでしょうね。

吉田 反対するなかには、インテリというよりも、貴重な働き手である子どもを学校に取られて痛い農民、庶民があつたと思うんですけど。

山之内 その話がね、なかなか出てこないですね、私の調べる範囲ではね。ただ、困つたな、ということはあつたと思いますよ。特に女の子が、子守りしてますからね、学校へ行かないことはよくありましたね。実は、おふくろなんかそうで、あのころもつと勉強しとけばよかつた、という話はよく聞きましたね。

ただ、少なくとも地域の指導者層の中では、知識を授ける人を見つけてくる、あるいは知識を得ることを大事にするということはどこへ行つてもありましたね。だから、あの一番僻地だつた虫亀でも、終戦の年に、もう中学校をつくらなきゃいかん、というので毎晩のように寄り合いをして、みんな自前で材木を提供して、奉仕して、汗水流してつくつた。演劇会をやつたりして寄付を集めてね。

吉田 お上に頼るとかいう発想じゃなくて。

山之内 行政依存つていうのは、ほんとにごく最近のことですよ。行政の長の村長よりも、村の寄り合いの区長

のほうが、力持っているんですよ。私のいた時でもね。だから、学校のスキー場なんかでも、またたく間にできちゃう。

吉田 お役所仕事じゃないから。好きやなー、そういうエネルギー。

山之内 地方へ行くと、そういうエネルギーがあるわけですね。民力を感じるんです。それに乗つかるとですよ、私は。乗つかった方が、くすぐられる、というか、そうだ！で動くんですよ。いいことはやろう、つていう地域ですから。

所詮、行政側の出先なんですよ、校長は。村長と同じ立場ですね。でも、地域を支えているエネルギーは、その土地で長年生活してきた村人たちの中にあつて、行政組織じゃない。着任するとまず、その地域の人たちとお酒を飲んだりしてね、歴史や産業や、どんな人が生きてるか、その実態に触れていく。そこからですよ、課題が見えてくるのは。

吉田 外から上から持ち込んだら、どんないいことでも押しつけになっちゃう。

山之内 うん、だけど、インプットはしている、つて言

われますけどね。自分の中でも問題が熟し始めると、いろいろしゃべるんですけどね。そうすると、相手が、その言葉をつないでいくんですよ。私も広がっていくんですけど、相手の人も広がっていくんですよ。自分のペースの上よね。誰がリーダーというわけじゃなく、発想した人がやるわけですから。立场上、私は校長ですが、参加するのがみんな主体的になってくるわけですから、誰にやらせられたというのがなくて。

そして、イメージが熟し、時が熟しますとね、どうしても吐かざるをえないんですよ。私は原稿を書くのは嫌いなんですけどね、白い紙を見るのは好きなんですよ。白い紙を一枚、しかもきれいな白い紙を見るのが好きなんです。そこへ、ぱっ、ぱっ、ぱつと、もう、デッサンするみたいにいるんなことを書き込んでいく。文字で書いたり図に描いたりね。思いつきをぱっぱつぱつと。もし、原稿用紙の枠目に書くと構えちゃうでしょ。

吉田 ふーん、やっぱりイメージの人なんだ。

山之内 そうですか（笑い）。それでね、全部一応吐き出しますとね、入って来るんですけど。不思議ですね。こう、どんどんまた新しい感覚で入って来るんですけど。ま

あまあ、遊びながら、っていうふうになっていく（笑い）。現実には、厳しい、その、生き方の問題が迫ってきますけど、まあまあ、うーん、それはそれなりに、現実的に処理していけばいいことで。

吉田 いまのも、おもしろいところでね。やっぱり、実際には、これだけの大胆な実践をやるうと思えば、現実的には難しいことがいっぱいあるんですよ。

山之内 ハハハ。そりやありますよ。この学校で、こういうもの集積していきたくない、と思っていると、二年ですぐ人事異動がある、そういうことは私にとって一番きつかったですね。でも、まあ、結果的に、一市町村に一つの学校で、五つを渡り歩いた、っていうのは、よかったですと思っているんですよ。

校長にとって、地域の人や教師たちとのいいつながりは、いい仕事をやっていく上でとても大切なことなんです。いい情報も良くない情報もとにかく自由に入ってくることは、それをもとにどのようにしていくかをお互いに考えていきますから。学校には、そうしたネットワークをつくっていく必要があるように感じました。

特集

多民族共生社会を生きる

奪われた民族文化をとり戻す

知里むつみ・八幡智子

(聞き手/石橋満里子・芦谷薫)



知里さん



八幡さん

*アイヌ刺繍との出会い

石橋 アイヌ刺繍というのは、育ってこられた過程で身近にあったのでしょうか。

知里 一人一人違うと思います。私の場合は、育ったところは、道南の江差という、シサム(和人)の人たちに侵略され尽くしたところですよ。私は登別生まれですが、小学校の二年の時に江差に引越したときには、私たちの家族だけがアイヌでした。ですから、日常的にアイヌの刺繍とか文化に触れる機会があったかというのと、まったくなかったと言っていると思います。

八幡 私はね、子どもの頃、母が夜なべに縫物をやっているのは見ていたけれど、刺繍は、母が小学校二年生の時に入院してしまったので、いっさい教わらなかつたんです。東京に引越してきて、アイヌの衣装を初めて見て、それに感動したっていうのかな。まだ、その時は若かったから、私には絶対できないっていう思いがあつて、少しずつ小さいものからやり始めました。なんていったらいいかわからないけど、とにかくやらなくちゃ、っていう感じで。親から教わっていないから、本を見てやりました。

知里 まわりでアイヌの刺繍は見たことはないの？

八幡 北海道で？ ないですね。ただ、いま思えば、親戚の人らしいんだけれど、アイヌ刺繍したマタンブシ（鉢巻）や着物を日常身につけていたお婆さんがいたけど、特別な服というより、あれがあのお婆さんの服だと思つて、深く考えなかつたから。

知里 本当は、アイヌの刺繍は、普通にアイヌの世界が発展していたら、祖母から母親に、そして子どもに伝わらなうんですね。でも、明治以降の同化政策によつて、刺繍もそうですし、アイヌの言葉も彫刻も、生活文化のすべてが、劣つたものとして捉えられていた。それで、使つちやいかんというおふれが出て、できなくなつたんです。私の母はシサムだから無理だけど、祖母のほうから伝わってくるはずが、日本の政策によつて途絶えたという、歴史的な事実があるんですね。

アイヌならばどうしてアイヌ語をしゃべれないのか、アイヌ刺繍ができないのかと聞かれるけれど、私たちが勉強しながらなかつたわけではなくて、長い間のそういつた、できない状況の積み重ねがあつたんですね。

石橋 私もチカツプ美恵子さんの本（「風のめぐみ」御

茶の水書房）を読んで、同化政策とか明治時代に作られた「北海道旧土人保護法」の内容を知り、さらには松前藩の頃から同化政策があつたことを知り、驚きました。

知里 松前藩の時には、華夷政策をとつたんです。同化政策は、江戸幕府と明治以降のことなんです。

松前藩が支配したときには、逆に、和人の言葉を学んではいけないということになつていた。アイヌが、自分たち和人と同じ言葉を使うと利口になりすぎて、自分たちのすることがわかつてしまい、困るといふのね。

ところが、何回か幕府の直轄になつたときがあるんですね、その時にはロシアが南下してしまつて、アイヌがいつまでもアイヌ語をしゃべつていけると、どこの国のものかかわらない、ということ、アイヌにアイヌ語を捨てさせて、日本語をしゃべるよう強制したんですね。そんなことが二回ぐらいあつたんですよ。日本語はしゃべつちやいけない、アイヌ語はしゃべつちやいけない、また日本語はしゃべつちやいけない、アイヌ語はしゃべつちやいけない。そして、最終的に同化政策に入つていつたということなんです。同化政策が本格的に始まつたのは、「北海道旧土人保護法」以降、一八九九年からです。

石橋 そんな経過があつたとは知りませんでした。先ほど、シヤモという言葉を使われましたね。シサムとシヤモいうことばは、違う意味合いで使われるんですか。

知里 シサムがなまってシヤモという説もあるし、シヤモというアイヌ語がきちんとあるという説もあります。アイヌには人間という意味があるのですが、和人が侮蔑的な呼び方として「アイヌ」が使われてきたため、それに対応したことばとして「シヤモ」が使われてきたようですね。つまり、シサムはアイヌ側からの「良き隣人」という意味があるのですが、シヤモは良き隣人ではない人たちに對しての呼び名になってしまったのです。

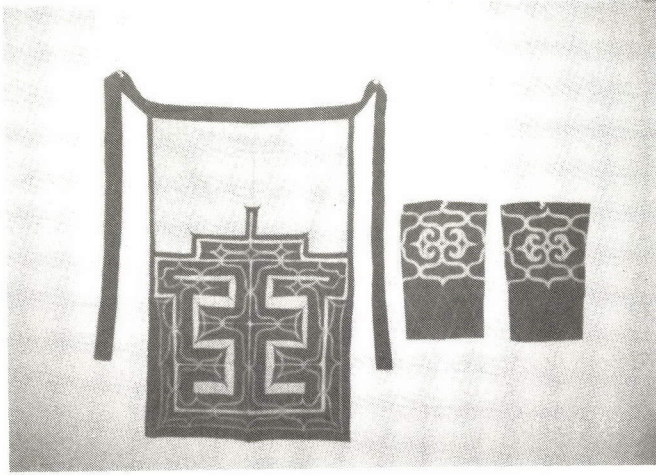
石橋 シヤモということば一つにも、アイヌの歴史があるんですね。ところで、私は、アイヌ刺繡の実物は見たことがないんです。本には、きれを細く裂いて張り付けると書いてあつたんですけれど。

知里 いろんなやり方があつて、土地によって違うようですね。これは（アイヌ刺繡の写真をみながら）、黒い生地を裂いて下の生地に縫い付けていく、「切り伏せ」という手法なんです。アイヌ刺繡の文様を施した着物は、地域によって違いますね。釧路あたりでは、「切り伏せ」

はあまりしなくて、生地の上に直接刺繡をする「チヂリ」という方式を使っているようですね。私は登別だから、「切り伏せ」みたいなものもあるんですけど、また少し違うようですね。

八幡 私は、浦河という襟裳岬あたりの出身ですが、紺色みtainな生地の上に、白じやなくてクリーム色っぽい生地を張り付けて、それから刺繡で押さえる方法です。
知里 伝統的に使われているのは、モレウやアイウシという文様です。モレウというのは渦巻の文様で、アイウシはトゲの文様です。カムイシキは、神様の目といわれて背中に置かれることの多い文様です。アイヌの文様は、ここで止まっているのではなく、左右対象で無限に広がっていく、広大な文様だと思うんです。マンタリ（前掛け）、ホシ（脚絆）やテクンペ（手甲）、マタンブシ（鉢巻）などを作ったりしています。本来なら母親から伝わってくるものが、途絶えてしまった。そこで、継承していこうということで、去年は関東ウタリ会でも刺繡展をしました。テーブルセンター、シャツ、バックにも刺繡をしています。アイヌ刺繡は、取り入れようと思えば、いろいろなところに取り入れられますが、飾ってお

くものではなくて、生活の中で実際に使うものです。
石橋 東北にこぎんざしがありますが、あれは江戸時代に綿の着物一枚しか着られなかったときに、糸を刺すことで、補強して暖かくするという方法だと聞きました。



マンタリ（前掛け）とホシ（脚絆）

知里 同じ感覚だと私は思いますね。実際に、手甲にはこぎんと同じような手法が使われています。脚絆にも取り入れられています。初めは、刺繍をする布地がなかったわけですから、アットウシという木の繊維を取って織った着物を着ていたんです。

石橋 アットウシから木綿に変わっていったのは、どんな経過があるのですか。

知里 和人との交易をして手に入れてからです。

芦谷 江戸時代でも木綿は贅沢品だったのでしょ。

知里 生地を手に入れるのは、ほんとうに大変だったようです。生地が手に入らないから、着物の左右の生地が違う場合もあります。ありあわせの家にある布で作るから違うんです。生地の色や柄が違うのを見ると、なんとか迫力があるんですよ。色が違うのさえもすてきに見える。昔のアイヌの女が作ったものは、技術的にはそんなに上手じゃなくても、何か違うんですね。

文様には、魔物をよせつけない意味があるわけで、魔物の進入しやすいところ、例えば、着物なら袖口、衿、裾などに文様を置いたのです。アイウシというトゲで、魔物が来たら入れないようにする。背中にあるカムイシ

キは、神様の目で睨みつける。背中には目がないでしょ。だから睨みつけるということを追いかけてもらう意味があるんですね。

芦谷 袖口って擦れちゃうし、肩も荷物を背負ったりして擦れますね。実用的な意味もあるのですか。

知里 もちろんあります。それに、いま見ると、芸術作品を見ているような力強い刺繍です。刺繍展にきたシサムの人たちは、何か懐かしいような気がすると言います。刺繍を見ていくのが五分や十分じゃないんです。一時間とか二時間とか座って見ていく人もいます。どうしてなんだろうなど、逆に私たちが考えさせられる。落ち着くような雰囲気があるんですね。決して私たちも上手とはいえないんですけど。一人だけじゃなくて、いろんな人の刺繍があるから、みんなのエネルギーが集まるということでしょうか。

石橋 それは単に芸術作品というわけではなくて、生活の中から生まれてきた刺繍ですし、踊りもそうですよね。

知里 神の文様をした刺繍をして、魔物を寄せつけないということは、自然の中には魔物といった人間の手に負えないというような存在があることがわかっていたん

ですね。自然に対して畏敬の念を持ちながら、神様に見守られているという、うまく言葉では言えないのですが、すべて、その独自の自然観に関係してくると思うんです。

*あらゆるものがカムイ

石橋 アイヌ民族が、北海道のような厳しい自然の中で、どうやって生きてきたかというところに、自然と人間との関わりの特徴があるような気がしています。熊は、着るための皮や食べるための肉を持って神の国から来たんだ、という考え方にとても惹かれます。

知里 おっしゃる通りです。熊に限らず、草だって木だって太陽だって火だって、いろんなものがカムイです。カムイというのは、神というより自然ですね。すべてカムイなんです。

神が人間に悪さをし、それに対して談判をアイヌがするという民話があります。神は、絶対的な、一神教の様な存在ではない、人間と対等な関係なんですね。つまり、合理的な考え方でもあるんです。人間が作ったものでも、一生に一度しか作れないようなものはカムイになれるんです。たとえば家なんかは、一生に何回も作れるもんで

はないから、カムイですね。チセコロカムイといいますが、舟でも大きな舟なんかは呼び方によってはカムイです。

私たちの生活の中で、アイヌの食べ物というのは結構残っています。おばあちゃんが登別の方に住んでいたの
で、アイヌブリ（アイヌ風）の食事ときどき作つてくれたんです。

八幡 熊や鹿の肉を寒くなれば食べて、米は食べなくてもそういうのは食べていました。

石橋 男の人が狩りに行くんですか。

八幡 それが生きるためですから。私が、十年前までご飯をたべたことがないと言うと、嘘だろうと思われるかもしれないけど、こつちに引越してきて、やつと米のご飯を食べるようになったんです。雪が解けてなくなると、おつゆの実を採りにいってました。いま考えれば、自然にとれるものを食べて暮らせるなんて、贅沢だったんだと思います。

石橋 お米のことをアイヌ語でトノアマムといつて、侵略者の食べ物だという意味だと聞いたのですが。

知里 白米というのは作っていなかっただけで、イナキピとかアワとかヒエは作っていたんです。シサムの人た

ちが肉を食べるようになったのが最近だとすれば、アイヌは昔から食べているんです。

例えば、動物を殺すという観念ではなくて、自然からお土産としていただいて感謝する。さらに、それを神の国に送る儀式をする。無駄な殺生をして、たくさん殺したわけではないんです。

熊祭りは、シサムの人たちが観光地でそれを見ると、残酷だというイメージで帰ってしまう。実際にはそうじゃなくて、カムイの国に送るための儀式なわけですね。

いまシサムの人たちが、形のない肉片を買ってきて、痛みも無く食べてしまうのとはかなり違って、アイヌは、そういった儀式を通して、カムイに感謝していったんです。農耕民族には多分この感覚は無いでしょうね。

*他民族を知ることによって

だから、他の民族を知ることによって、自分の民族がどういふものであるかを知ることが大切だと思います。

例えば、英語は習いますよね。だけど、自分の国の中のアイヌ語は習わないし、朝鮮語や中国語も習わない。アイヌ語を習ったからといって、世の中の役には立たな

いけれども、それを習うことによつて、アイヌ民族の価値観と自分たちの価値観の違いがわかると思うんです。

そのへんのところでできるとしたら、家庭科では、アイヌの刺繍や料理や、いろんなことができると思うのね。

家庭科だけではなくて、美術の先生も刺繍の文様を取り入れて指導できるでしょうし、国語ではアイヌ語をやればいいし。アイヌの文様が好きなシサムの人たちが増えているのは確かで、アイヌ問題がどうのこうのというのを抜きにして、アイヌ文様に魅かれる人も多いのね。

菅谷 そのことをどう思われますか。

知里 それをやることによつて、その中にある精神的なものをつかみ取ることができればいいんです。もっとも、きちんと歴史的なことを踏まえたうえでやるのとはまた違うんでしょうね。刺繍だけを習いたいというのは、私たちが意図していることとちよつと違うかなとも思います。

菅谷 まず、心が開かれるというのが、きつかけにはなるというか。開かれてすてきだなってつながり合えるなかで、ほんとに徐々にではあるけれども、自分たちの知らなかった歴史を知ることができますね。

知里 シサムの人たちは、知れば知るほど自分たちの先祖がしたことを知るわけですから、快いもんじやないはずです。でも、縄文時代とかの話ではなくて、あなたのおじいさんやおばあさんがしてきたことなんだと。知らないで一生いるよりも、知った上で反省し認め合うことが必要だと思います。

菅谷 生徒たちが、新聞の切り抜きをやっているんだけど、在日外国人の話や従軍慰安婦のことだと、こういうのばかり、つて言うんですね。日本人ばかり責められていると、子どもが取っているんですね。自分の人生を理不尽なことによつて変えられてしまうということが想像できない、民族の言葉を使えないとか、名前を変えられてしまうとか、まったく知らない世界につれていかれたり、騙されて慰安婦にされるとか、生徒にとっては思いもよらないことなのね。それで、何で、日本人はこんなにひどく言われなきゃならないのか、と。

知里 大人が隠してきたから、子どもは知らないのですよ。日本が、アイヌ人にも名前を変えさせたり、日本語を強制したことはもちろん、韓国や朝鮮の人たちにしたことさえも知らない。私たちも、明治四年に戸籍法がで

きたときに、名前を強制的につけられました。松浦武四郎の日記を読んでもらえばわかるけど、慰安婦に関して、江戸時代の侵略者の役人や商人といったシサムは、奥さんをつれて任地に来たわけではないから、アイヌの女性たちを慰安婦にした。韓国の人たちにやったことの下地が、既にアイヌとの関係にあったということね。

今、中国の残留孤児の人が続々帰ってきているけど、入植者のシサムが育てられないで捨てて行った子どもたちを育てている、アイヌのお父さんお母さんたちがいるんです。約五千人ものシサムの子どもたちがアイヌの家庭に置き去りにされました。植民地にしたことは、北海道で成功を収めてまた同じことをしたと、そういうふう
にアイヌからは見えるんですね。

一般の人に知らされていないというのが一番ネックじゃないでしょうか。小さい時に、そういうことを知っている人と知らなかった人は社会に出てから違うと思うんです。個人が努力して知るより、学校教育できちんと学ぶチャンスを与えてもらうことが必要ですね。アイヌとシサムの歴史は一番長い関わりがあつて、教科書に二、三行で表されるようなものではないと思うんです。

ただ、アイヌの子どもが、アイヌのことを習うというのは、危険な部分もありますね。教師側が、アイヌのことをよく理解していなければ、その教え方によつては、クラスの中で孤立したり、一層差別されたりすることにつながっていくと思うんですね。私たちの時代だと、アイヌということが教科書に載っていて、それが教えられることによつてなお差別される時代だったから。今の子どもは、それを跳ね返すだけの力を備えてきたと、私は思いたいのですが。(まとめ/石橋満里子)

参考文献

- 「しよっぱい河」 小笠原信之 景書房 1854円
（関東に住むアイヌの人たちの生活を取材したもの）
「明日を創るアイヌ民族」アイヌ民族の現在と未来を考
える会編 未来社 1800円
（アイヌの人たちへのインタビュを集める）
「風のめぐみ」チカップ美恵子 御茶の水書房
2472円
「聞き書 アイヌの食事」 農文協 2900円

多民族共生の教育に向けて

小沢 有作

(聞き手・まごめ／石橋満里子)



石橋 私たちは、つい、日本は単一民族国家のように思いがちですが。

小沢 日本には日本人しか住んでいないと思っっている人が多いですね。その中で先生も、学校には日本人の子どもしかいないと思っって教育をしてしまっている。

でも、周りを見ると、日本人以外の民族が住んでいることに気がつきます。まず、アイヌ民族の人びとです。北海道、東北を中心にたくさん住んできた「先住民」です。日本は、和人とアイヌが一緒に住んできた列島なん

だと考えるべきでしょう。アイヌの人たちは、北海道庁の調査によると、約二万五千人です。東京のウタリ協会で行った調査だと、関東には二千七百人ぐらい住んでいます。和人と結婚したり、朝鮮人と結婚したり、混血も含めまして、アイヌ民族は五万人以上いると考えられます。日韓併合以降、日本に來た朝鮮人は、一九四五年八月に一番多くて二百四十万人。日本の敗戦と同時に帰り、残った人は七十万人です。

今日も、外国人登録をしている朝鮮籍・韓国籍の人は七十万人ですが、日本に帰化したり混血の人を含めれば、百万人を越えます。また、中国人は、明治の開国と同時に日本に住むようになりました。現在、十五万人です。一九四五年以前に移り住んだ在日朝鮮人、在日中国人を「オールドカマー」、「定住外国人」と呼んでいます。

一九七十年代以降、多くの外国籍の人が來住するようになりました。ニューカマー、「來住外国人」といいますが、その最初の人たちが、中国残留孤児の人とその家

族です。その数は一万二千人ぐらいですが、中国語、中国文化の中で育った人が日本に移り住みました。

その後、インドシナ難民が八千人、ベトナム、ラオス、カンボジアから来ました。神奈川県大和市と兵庫県姫路市にあるインドシナ難民定住センターに来て、四カ月間日本語を勉強して、仕事に就きます。定住センターの周辺に生活している人が多いですね。

さらに、アジアの花嫁です。これは、農村の男性との結婚が目立っていますが、都市の男性ともたくさん結婚しています。ぼくが調べたのは、山形の最上川地域ですが、農村の女性は外へ出て行ってしまうので、その農村地帯に三十代から四十代の男性が独身で残されているわけです。行政が仲介した村もありますが、多くは業者が仲介しています。最上川の流域だけでも、フィリピン、韓国、中国の花嫁が二百人は住んでいます。その子どもたちが保育園から小学校にあがる年頃になっています。そして、外国人労働者の来住です。近年、ブラジル、ペルーに住んでいる日系人がたくさん来しました。アジア人労働者は単身者が多いけれど、日系南米人は家族連れが多い。これらの人びとは合わせて六十万人ほどです。

学校に通うのは、日系南米人の子どもが多いですね。

石橋 学校ではどのような状況になっているでしょうか。

小沢 文部省は、一九九一年度に、日本語を話せない子どもたちが学校にどのくらいいるか調査をしたのですが、小学校には、四千人が、千四百校で学んでいます。中学校には千五百人、五百四十校です。小中合わせて、五千五百人、二千校の学校に日本語の話せない、ニューカマーの子どもたちが学んでいる。

日本の人口は一億二千万人ですが、そのうち、日本人以外の他民族の人が一%以上住んでいます。朝鮮人が百万、中国人が十五万、アイヌ人が五万、ニューカマーが七十万から八十万。合わせて二百万人ぐらいですから、一・五%ぐらいになりますか。

学校の生徒は、一九九一年度現在、小学生が九百六十六万人、中学生五百十九万人、計一千四百三十五万人ですね。アイヌの在籍者の数は、四千五百人ぐらいです。在日朝鮮人は、朝鮮人学校に行っている子を除いて約九万人。中国人の子どもは、一万人ほど。ニューカマーの子どもたちは五千五百人となっていますが、もっと多いと思います。合わせると、十一万ぐらいですね。生徒数の

一%弱。ただ、これは、アイヌは別にして、外国人登録証で捉えられる数です。それに、日本に帰化した子ども、中国から引き上げてきた日本籍の子ども、混血の日本籍の子どもなどを加えると、一%になります。国籍と民族は別のカテゴリに分けたほうがよい。日本の学校にも日本人の生徒以外に一%の他民族の子どもがいるわけです。学校も多民族学校になっているということですね。

石橋 私たちは事実としては知っていますが、多民族社会、多民族学校という意識がないように思うのですが。

小沢 ニューカマーの子どもたちは、日本語ができないし、本名が入ってきますから、新しく外国人が入ってきたという意識が現場の中にできて、だから、その対策として、日本語学級を作ろうとしています。

でも、もう一つ前の時代にきた在日朝鮮人の子どもは、三世、四世になって、日本語で育ち、そのうえ八、九割は日本名で通っています。籍は外国籍でも、実態は日本人と同じように見えてしまう。朝鮮人の子どもが、一緒に勉強しても、外国人という意識がない。アイヌの子どもたちは、明治の初めに日本名に変えさせられて、日本語のなかで育っているから、アイヌ人という民族的他者

としてなかなか見れない。ですから、学校現場では、「アイヌ人という日本人」「朝鮮人という日本人」という意識で、他民族という意識はなくなっている。そのくせ、「アイヌ」、「朝鮮人」といつて排除するのです。

歴史的に見れば、アイヌの子どもにたいしてアイヌ学校を設けて、同化教育をし、目的を達成したといつて、一九三七年に廃止、和人の学校に入れます。次に、朝鮮人が一九三〇年代にきます。その子どもたちをたいしてはすぐ日本の学校に入れ、日本語を教えました。アイヌ人同化、朝鮮人同化の教育です。民族的アイデンティティを奪ってきたわけです。そして、今、学校は三たび、日本語のわからない他民族の子どもを迎えています。同じ誤りを三度くり返してはならないと思うのです。歴史の反省を生かして、こんどこそ、お互いの民族を認め合つて生きられるような教育を創り出していきたいですね。**石橋** その手だてのひとつとして、神奈川県から、中間報告がでるそうです。

小沢 『民族共生の教育を拓こう』という題名で、六月初めには出ます。神奈川県のある学校には、在日朝鮮人の子ども二千五百人、在日中国人、日系南米人の子どもそれ

それ九百人、インドシナ難民の子ども七百人等々、全部で五千三百人の外国籍の子どもが学んでいます。その子どもたちみんなが、それぞれの民族の名前を名乗って、胸を張って生き、学べるようにしたい。民族差別ももちろんなくしたい。そのために取りくむべき教育の手だてを具体的に提起し、新書本一冊ほどの分量になりました。

民族共生の教育には三つの課題があります。在日朝鮮人の子どもは日本で生まれて、日本語を知っています。母国の言葉文化を知らないのですから、その子どもたちにとつては、母国の文化や言葉を知ることが必要です。これはアイヌの子どもたちと同じです。

他方、ニューカマーの子どもたちは、母国の文化や言葉を知っているけれど、日本に来たばかりで、日本のことを知らない。だから、この子どもたちには、民族性を失わないようにしながら、日本語や日本の文化を勉強してもらおう。課題は違うわけですが、それぞれが、民族アイデンティティを持つと同時に、日本の中で生活できることばや学力を身につけるといふ点では共通しています。日本人の子どもが、隣に座っているマイノリティの子どもたちに対して、民族差別しては困るんですね。隣に

いる子どもの母国の言葉や生活に関心を持ち、アジアに目を開く子どもにも変わっていかなければならぬ。

在日外国人の子ども、日本人の子どもが、共に学び変わっていく。だから、民族共生の教育というのですが、先に変わらなければいけないのは、マジヨリテイである日本人の子どもの方です。そして、その前に、なによりも教師が民族共生の立場に立っていないければなりません。教師が鍵をにぎっているのです。

教師には何よりも生き生きとした好奇心を持つて欲しい。目の前に座っているマイノリティの子どもは民族的な存在ですが、その父母ともなれば、民族文化の保持者です。在日ラオス人の子が在籍していれば、身近にラオスがあるようなものです。ラオスの料理を食べに行つて料理法を習つてくればいい。ついでにラオスの服装、子育て法も、生活もたくさん聞いてくればいい。目の前にラオスの生活文化の先生がいるわけです。それを学んで、教室に生かすよう発想を広げればいいのです。

多民族社会・多民族学校になつたといふことは、身の周りでも多民族の文化を直に学べるようになったといふことです。

特集

多民族共生社会を生きる

国際教室を訪ねて

石橋満里子



「こんど転入生が来ますよ」と先生。
「どこの国の人？」と子どもたち。

ここ天台小学校（山根英昭校長）では、転入生がやってくると、「女？ 男？」ではなくこんな質問が飛び交います。

天台小学校では、一九七七年にラオスの難民の子どもたちを受け入れ始めてからすでに一七年。さらに、ベトナム、カンボジア、ブラジルから、そして現在は中国、韓国の子どもたち（九三年一月現在計四十名）が学校に通っています。アジア系（ラオス、カンボジア、ベトナム）の子供たちは、定住促進センター（大和、大村、姫路等）や国際救援センター（東京）において、三〜四ヶ月間の日本語指導を受けてから編入してくるので、学校生活への適応は少し早くなります。しかし、ブラジルの子どもたちは、本国から直接来日し、まったく日本語指導を受けないままに編入してくるので、日常会話からの指導が必要となります。

そのような状況から、九〇年より「日本語教室」が開設され、九二年には「国際教室」（現在綾瀬市には小中合わせて五校に設置されている）と改められました。基本

的には、親学級（日本人の子どもといっしょの通常の学級）に所属し、必要に応じて週に数時間、国際教室で学びます。

天台小を訪問した日は、ベトナムのランちゃんといっしょの双子の姉妹が転校する日でした。帰りの会では学級の歌と一緒に歌ったり、日本語で別れの挨拶をし、すっかり学級に溶け込んでいる様子です。黒板の隅にはベトナム語のあいさつが、カタカナで書かれています。どの教室にも、いろいろな国のあいさつのことばが、黒板にカタカナで書かれているそうです。

池田文江先生は国際教室の専任の教師です。外国の子どもたちが急増した頃からかわってこられた方で、ことばが通じない子どもたちと、身振り手振りで会話をし、生活習慣のことや物の名前など教える中から教材も開発してこられたのです。途中からは日本語指導協力者（ベトナム語、ポルトガル語、カンボジア語、ラオス語を話せる指導員）が綾瀬市より配属され、ことばの通じない苦しみや、文化や生活習慣の違いからくるストレスを少しでも解消するための措置も進んでいます。

学校全体としての取り組みでも、これまでである学校行

事の中に、国際教室としての催しものを入れながら、日本の子どもと外国の子どもの交流が自然に行われています。次の作文は、十一月に行われる学校行事「天台まつり」で、アオサイ（民族衣装）を着てベトナムの踊りを披露したときの作文です。

楽しかった天台祭り！

五の一 フィンティビタヴァン

今日は天台祭りです。私が体育でおどりをみんなに、見てもらえます。

そのとき私は、心の中で、どきどきしました。そしていよいよ、ベトナムの番です。

私は、しんばいでした。そして、今おどりはじめました。つづけておどりました。

そして、終わりました。そのとき、みんなが、大きなはくしゅをしてくれましたので、私は、すごくすこくうれしかったです。

私は、日本にきて、学校でおどるのが、はじめて、それに、はじめて、日本で、ベトナムのおどりをおどるのがはじめてです。でもみんなは私たちに大きなはくしゅをくれてと

てもうれしかったです。

この天台祭りは、私の心の中でいいおもいでに残ります。

(天台小学校 平成4年研究紀要より抜粋)

日本人は、いままで単一民族であるがごとく生活をしてきたため、民族という意識を感じることなく生活をしてきています。しかし、ここ天台小学校では、他の民族の友だちと日常生活を共にし、その友だちの民族文化を衣装や踊りにより知ることで、自然と交流が行われています。となりに座っている友だちと仲よくなることで他民族のことにふれ、民族の違いを理解していくところに、民族共生へのヒントが隠されているのではないのでしょうか。

これは、作文朗読会(授業の中で書いた作文を友だちの前で発表する行事)での日本人の子どもの感想です。

なにか してあげないと

六年三組 森 美菜子

外国のお友だちの作文を聞いて、私はほとんど何もしゃべれなかった。内心、とてもおどろいていたので声が出せなく

なっていたのかもしれない。ふだんはみんなとあんなに仲良くして笑っていたにもかかわらず、こんなにつらかったことがあったなんて……。

とくに、この学校にくる前にいた学校で友達から差別をうけていた、ということを知ったときは言葉ではいいあらわせないようなつらさがあった。でも、一番つらかったのは本人だと思う。みんなに話すのも、きつとすぐつらかったんだろう……。

「外国のお友達の苦勞を今まで一度も考えたことがなかった」だから、いん象に残ったといえはそうかもしれないけど、私はすぐはさくはさくかしいことだと思う。

国語の授業のとき、外国のお友達が日本語の教科書を読めた。そのときはみんな喜んで。そのお友達もすぐうれしかっただろうし、今でも読めるようになるまでの努力や苦勞、読めたときの喜びは忘れてないだろう。

でも、私たちはきつと忘れてしまっている。日本の子が日本語を読んだり書いたりできるのはあたりまえだけど、外国のお友達は、そのあたりまえに少しでも近づこうと努力している。

そんな努力を認めてあげて、むだにしないために、私たち

はなにか、してあげないといけないと思う。

(天台小PTA冊子「わかってよ、ボクたちを」より抜粋)

次の作文は、ベトナム人のディンティクアンさんの作文です。

「日本国へのメッセージ」

六年一組 ディンティクアン

私は、4年前に知らないことで日本に来ました。来たときは、九才ぐらいでした。ベトナムにいた時は、日本と同じように学校にかよっていました。私は、学校へ行くのが楽しみの一つでした。なぜなら、学校は私の知らないことや知りたいいことを教えてくれるし、良い人になるための大切なことを教えてくれるからです。そこには、友達がいっぱいいるからとても楽しいです。

ベトナムのくらしはたいへんだけど、毎日が楽しいから、そのたいへんさを忘れてしまうのです。

私は、母国を出ていくことはぜんぜん知らないことでした。お父さんが私達を海に連れて行き、そこで知らない人たちが海に出ました。私は、初めて船に乗ったので気持ちが悪くて

とてもたいへんでした。夜には、海の真ん中にある船からキラキラとした星がピカピカ光っているのが見えてとてもきれいでした。そのきれいな星空を見ながらねむる日が8日間続きました。だんだん水が足りなくなってきたので、「これから、どうなるのか」と考えて、私はとてもこわくなりました。八日目の夜、大きな船が私達を救ってくれました。その船での六日間のせいたくなくらは、とても楽しい日々でした。やがて、その船が地面に着き、私達をおろしました。お別れの時、船の人たちからたくさんのプレゼントをいただき、飛行機に乗って日本にやってきました。日本の空港におりたら建物がいっぱいでびっくりしてしまいました。大村センターというところではばらくくらししてから、また飛行機で日本国際救援センターに引越しました。そこには、私と同じベトナム人がいっぱいいて、三か月間日本語の勉強をしました。そのあと三学期の終りに、私は日本のふつうの学校に行くことになりました。初めの日、私は教室に入って不安がいっぱいでした。「何と言えば、いいのかな」と、迷いながら静かに席にすわって先生がいらっしゃるのを待ちました。先生がいらっしゃって、私をみんなに紹介してから勉強が始まりました。

一週間が過ぎて、私が次の学年に上がったある日のことでした。音楽の時間にだれかの教科書がなくなつたことで、さわぎになつてみんな自分の机の中を調べることになりました。なぜか、私の机の中にあつたのです。私もぜんぜん知らないことで、「なぜ、私の机の中にあるんだろう」と思い、とても困ってしまいました。それから「なんで取つたの」とか、「なんで取つたんだよ」とか言われました。「私が取つたんじゃない」と言つても通じませんでした。私は、おこつてケンカをしてしまいました。時々、「学校なんか行きたくない」と思うこともありました。

お父さんの仕事のことでも二回学校がかわりました。だんだん日本にも慣れてきて、友達もたくさん作れるようになりました。一番うれしかったのは、いつもケンカしていた子と最後には仲良くなれたことでした。

新しい学校（天台）に来て、もう二年たち、友達もたくさんいて、だいぶ日本語がしゃべれるようになりました。おもしろい先生もいるし、同じベトナム人が二人クラスにいるので、ベトナム語を忘れる心配ありません。今は、学校へ行くのがとても好きです。二人のベトナム人が日本にきて長くないので、日本語をあまり知りません。それは、私が日本に

来たばかりの時と同じです。だから、私ができることがあつたら、やってあげたいなと思つています。

日本に来てからの四年間が、なにか夢のような気がします。日本でいろいろなことを体験しました。たいへんなことや悲しい事やつらいこと、嬉しいこともありました。私は日本に来たとき、まだ日本語が分からなくて、言いたいことがうまく伝えられずにつらい思いをしたことを思い出します。でも、今は上手に日本語がしゃべれるので、それを使って日本に来たばかりの人が前の私のようにならないように、何かしてあげたいと思います。どれだけのことができるかは、わからないけど、努力してがんばっていきたいと思います。

（天台小PTA冊子「わかつてよ、ボクたちを」より抜粋）

母国の文化と日本の文化のぶつかり合いが生じるとき、いろいろな問題もできます。それを乗り越えるための国際教室がここにあることを感じました。池田先生が「帰りの会が終わってから、いつもこの教室に立ち寄る子どもがいます。何か用事？ と聞いても、何も言わずに部屋の中をグルッとまわつてでていきます」と話されるのを聞き、この教室の存在があるから、外国の子ども

私たちは、日本でのつらい経験も乗り越えていけるのではないだろうかと思いました。

しかし、それは国際教室の存在だけで外国の子どもたちが生かされているわけではなく、学級担任の学級での取り組みや家庭との交流（通知表や配布物は翻訳されて配布、国別保護者会）、さらにはPTAでの民族料理の講習会を通しての保護者同士の交流、PTA新聞での国際教室の紹介などがそれを支えているのだと感じました。私は、日本人だけの学校、地域で育ってきました。そして、今、在日朝鮮、中国、アイヌの人と知り合う中で自分とは違うと思っていた人たちが、同じ人たちなんだと感じています。そして、その人たちの民族文化や生き方をもっと知りたいと思うようになりました。ひとりの人をもっと知りたいと思う欲求が、人と人が共生できる関係を作っていけると思うのです。今、日本人の私たちが、自分に関わりのある外国人やアイヌの人を、自分の家の食卓に呼んで、語り合い、民族文化の交流をしていくことが、民族共生の第一歩ではないでしょうか。

ブラジル

(ブラジル連邦共和国)

- 国土は 8512,00km² (日本の約22.5倍の面積)
- 人口は 14,123,5万人
- 首都は **ブラジリア**(Brasilia D.F.)
- ことばは **ポルトガル語**
- 通貨単位は **クルザード**(Cruzado)Cr\$
- 主要産業は 農牧業(コーヒー、砂糖、大豆) 綿花、鉄業(鉄鉱石、鉄) 工業(鉄鋼、機械、電気)



社会文化

ブラジル社会は人種が混ざり合った白人、黒人、黄種人とそれらの混血者が互いに同化した文化が育ちつつある。国民は一般に歌と踊りが大好きで陽気で社交性に富み、開放的、カーブの人々の生活の一部になっている。フィッシュ(魚)も大好き。



年中行事

- 1月 新年(12/20-1/31)
- 2月 carnaval
- 3月 カーニバル
- 4月 イーasterのまつり
- 4月 始業式
- 7月 (7/1-7/31)
- 9月7日 独立の日
- 10月15日 教師の日(学校始業式)
- 12月 運動フェスト

サッカーは国技



気候

アマゾン地域は 熱帯雨林気候
中部高原は 亜熱帯気候
海岸平野は 熱帯気候
南部は 温帯気候

義務教育

は 7~14才
初等教育
中等教育
高等教育

(教材より)

異文化から

見れば

谷辺 葉子



塀くらべ

「なぜ、どの家も塀が低いの？」私の家からバス停に向かいながら、ハリー君は尋ねた。「低い方が中がよく見えるでしょ。泥棒が入ったとしても、おかしな動作をしていれば通る人にもわかるから、もし高かったら、一度中に入ってしまったらあとは誰にもわからない」

「ふーん。フィリピンでは塀は高いんだよ」「なぜ？」
「防犯のためなんだ。泥棒は、塀が高い方が簡単に入れないから。地域によっては何件かの家の周りを塀で囲ん

うか？ では日本人は？ と考えて、あっと心の中で叫んだ。

日本人のこの「常識的」な考え方、たんなる習慣や常識という解釈を越えて、実はくせ者だったのだ。よく言えば、他者からの安全確認を受け入れ、近隣が和気あいあいと暮らそうという、狭い日本での知恵とも言えるだろう。だが、紙一重のところ、「近隣の監視」にもなりうるからだ。

定住型の者どうしの町内では、お互いの顔も家族構成

でセキュリティ・ガードをおくところもあるんだ」「ああ、アメリカン・スタイルね」ハリー君は、一週間の予定で我が家にホーム・ステイしている、フィリピンの大学生である。専攻はアジア学とマーケティングだそう、実によく勉強をしている。それだけに、次々と質問がとびだす。ハリー君の帰国後、つらつら考えた。彼らは、自分の家は自分が守るという点で自立心が旺盛なのだろう

も、かなりの部分を他者に知られることとなる。しまいには、夫はこの会社に勤めていて、子どもはこの学校に行つて、奥さんのパートはどこで、どんな種類の車があつて、あるいは一台かそれとも二台か、それなら我が家と同じレベルだね、なあんで……。楽しい我が家の周りは、こんな情報に取り囲まれている。

さらに、「我が家」は「わが自治会」に属しているのだが、そのまともり方や訴えからは、情緒的なる義務感への喚起がジトトっとしみ出てくるし、その上、役を引き受けない人への陰口なんぞを聞くにおよんでは「隣組制度」を連想してしまつて、ゾツとするのです（自治会に限らず、この類のことって日本中にありません？）

でもね、問題はそこなんですよ。「べつたり隣組」にぶつぶつ言っているながら、無意識の内にへたかが塀の建てかた一つの中に潜む他者からの目という監視体制を、私は受け入れていたのだから。

ハリー君たちの別れの挨拶は長い。お別れパーティーの夜、閉会宣言後、実に三十分は要したのじゃないかしら。明日の朝会うフィリピンの友との別れにである。「さよ

なら言うのに、ずいぶん時間が必要なのね」帰宅後、私は彼に言った。

「フィリピンの社会は、人との関係がとても密なんだ。友達と肩を組んで歩いたり、親しい友だちなら何でも打ち明ける。だから、たった一日別れるだけでも、ほんとうに寂しいなと思うんだよ。友だちによく電話もするし、電話での話も長いよ。一時間でも二時間でもしゃべっている。同じエリア内なら基本料金のほかに電話料はとられないからね。日本人は、あまり友だちに会わないの？ 電話もしないの？」

そういえば以前、「日本の電話料金は高いのか」と聞かれたっけ。どうやらハリー君は、電話代が高いために日本人は友人とあまり長話をしないのだろうと思つていようだった。さて、なんて言つたらいいのか。電話は用件を伝える機械、という私たちの認識、片や人間関係を結ぶ道具、という考え方。でも言われてみれば、初めは十円で三分間（だけ）話せるが、以後一分ごとに加算されるという「タイム・イズ・マネー」は、人間関係を疎外するような気もする。はてさて……。

もう一度「塀比べ」に戻るが、アメリカの家の塀も高い。どうも裕福な家に多いようだったし、私が住んだロス・アンゼルス郊外のタウンハウスには、セキユリティ・ガードもいた。でもその門たるや、線路の遮断機のよな棒が一本あるだけで、歩いて入るなら誰でもOKという代物だった。そして、塀のない家なんて、いくらでもあるのだ。

たかが塀。しかし、塀一つでも、日本人と他の国の人との考え方がくっきり現れるというのは、まことに興味深い。高い塀を廻らし、防犯に備えながらも、人間関係が緊密なフィリピン、塀は低く他者の目を受け入れていながら親しい人間関係となると薄く見える日本、高い塀も塀のない家もあって、てんでんバラバラに見え、それぞれが住人の個性と見えるアメリカ。コミュニティに対する意識や人間関係が透けて見えてくる。

我が内にくぐもる日本人意識

スリランカのブワネカ氏が泊まったときのことだ。

「実は、招待状をばくに送って欲しいんだ」と彼はきりだした。「スリランカから日本へのビザはごく限られて

いて、なかなか下りないんだ。でも、日本人が招待してくればすぐにビザは下りる。今度の滞在は短くて、よく日本を見られなかった。一か月ぐらい滞在して、もっと知りたいんだ」「ビザのことは私には分からない。日本の受入れ事務局の人に相談するわ。それで、一か月間もどこに泊まるつもり？」

「君の家に泊めて欲しいんだよ」

エエエエエーッ！ちよおっと待ってよオ！そんなア！！私的心中が錯乱した……（頭ではない）。

我が家を見ればわかるでしょう？ どこにも空き部屋のないことが。ホームステイを受け入れるたびに和室を明け渡し、身の回りの物を持って息子たちの部屋に居候しているのだ。「ねえねえ、お願い、ここに泊めて？」と。ただでさえブロークンな私の英語は、なお一層しどろもどろになって、舌をもつれさせながら、やっと断った。一か月も貸せる部屋がないこと、私は仕事を持っているので、一か月もホストファミリーとして世話はできないことなど。でも、彼は理解できたかしら。

……それにしても、日本の受け入れ機関が、彼らに前もってホームステイのルールを説明しているのではなか

ったのか？ 他の国の人と仲よくしたいし、泊めるといっても二泊三日ならそう負担にもならないだろう。ちょうどよい長さの交流だと、単純に考え過ぎていたのかもされないなあ……。あとあとまで、私は重い気分でした。

ようやく落ち着いた頃、気がついた。我が家を見れば、誰にも事情がわかるものだという私の思いこみは、私は何も言わなくても相手が自分で理解してくれるという期待、つまり「甘え」だったのだ。プワネカ氏から見れば、ほかに部屋があるかどうかはホスト側の事情であり、現に彼は泊まれたのである。今後はまた日本に来たいと思うし、二泊三日を仲良くできたのだから、また泊めてほしいと思う。彼は率直に希望を述べたに過ぎなかったのだ。だから私の対応としては、できないことを事実として伝えればよかったのである。

「率直さ」はアグレッシブと同義ではない。自分はどう考えるか、どう思うか、何を希望しているか、などを相手を傷つけぬよう配慮しながらも明確に伝える事。それが異文化間でのつきあいには大切なのである。

ああ、何ということだ！「率直な」言動は、私もアメリカにいた間さんさんやっていたことだったし、「率直」

でなければ伝わらないことは身にしてみたいはずなのだ。おまけに、日本へ帰ってから二年もの間、きちんとものを言いつけて、お巡りさんともめそうになったこともあるじゃないか。

事実を率直にやりとりするのなら、私の頭が少々混乱するだけで、心が錯乱するほどにはならなかったはずである。また気分が重くなってしまった。

自分を知らないと

「自分をよく知ることよ」

アメリカ人と結婚したメキシコ人のアンジェラは、

「夫とけんかをしたときの解決策として大切なことは？」という私の質問にこう答えた。

「え？ 言葉じゃないの？言葉がうまくなれば、自分が言いたいことがよりの確に説明できるし、そうすれば誤解もなくなると思うわ」

私は少し驚いて聞き返した。

「……いいえ、やはり自分をよく知ることだわ。自分はどんな人間なのか……」

アンジェラは、考えながらゆっくりと言った。それ以

上はどう説明したらよいのか、というような戸惑った表情をみせた。彼女の言葉がようやく理解できたと思えたのは、それから二年たっていた。

コミュニケーションの上で基本となるのは、自分は今何をしたいのか、何を言いたいのかを、自分の中で明確にすることだろう。自分の意志を明確にすれば、言葉が上手にしゃべれなくても、あるいは語彙数が少なくても、わずかな言葉でそれを伝えられるからだ。たいていの場合、伝えたい内容の核はシンプルなものである。そのシンプルさを追求せず、自分の意志を曖昧にしたまま多くの言葉を発するとき、相手は混乱する。また、自分の曖昧さによって、自分の感情も混乱する。

自分が伝えたいことを自分の中で明らかにし続けていると、自分という人間が見えてくる。すると、今要求したいことが、自分自身に妥当かを考えるようになる。それは、自分に対する規範を自分の中に作ることにつながるし、規範を持つと冷静に自分をチェックするようになる。さらにその冷静さによって、相手の言葉に対して、怒ることもむやみに傷つくこともない自分が作られていくことにもなる。

言葉に置き換えると額にしわがよりそうだが、アンジェラが言いたかったのはこのようなことではなかったかと思っている。

そして、自分の意志を明らかにし続けることで見えてきた自分、つまり「自分とは何者か」を語ろうとするとき、「アイデンティティ」というむずかしい言葉に行きあたるのだ。

「アイデンティティ」が曖昧であったり揺れていたたりすると、相手とのもたれあいができないときにひどく傷つくことになる。中津燎子さんは、著書『母国考』の中で、「アイデンティティ」を「安定根」と訳している。これは、「人間が人間社会の中で、他にかけがえのない一人として安定して存在するための根」を縮めた中津さんの造語である。言い得て妙、と感心する一方、私には、

「存在根」という言葉にしたほうがもっとびったりくる。自分という存在の根っこをもっていけば、異文化の人と出会った時のショックや戸惑いは乗り越えられるだろうし、何度かショックを繰り返せば（願わくば乗り越えたいものだが）出会いを楽しめるようになるのではないだろうか？

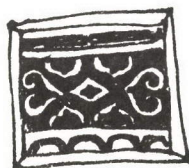
（フリーライター）

特集

多民族共生社会を生きる

人間 アイヌの空

向井豊昭



夕日が西に沈むころ、西へ走る新幹線に飛び乗るのがわたしの日々の仕事です。時間ぎりぎりに集まってきた東京支店の書類をバッグに詰め、富士山のよく見える街の本店へ届けに行くのです。夕焼け空を背にした富士山の姿が迫ってくると、時間に追われた肉体からスッと魂が離れ、窓の外へ飛んでいきます。富士山に引き寄せられるわたしは、日本人の一人でした。

そんな時、離れていくわたしの魂をきまめて引き戻すものがあります。北海道の空と夕焼けです。

*

せんせのこととぼくのこと

ぼくこの二ねんかんせんせいとべんきょうしてきたいまれもとせんせいとべんきょうしたいぼくわとうさんがいなくてもさぬし

*

のなかわすれてしまったせんせもとうさんがいないでしょせんせわもさぬしくわないでしよでもぼくわたまにとうさんのことおもいだすとなみだがでるとうさんとやまさいたのおもいだすあのやまさいときしばきりやたときこうさがいたぼくわおうかけたとうさんわおうかけたぼくわつかんでりくのなかえいでたせんせがもしかしこしたらかんじかかないでてまぎおくてわせんせいかとうさんのことおかけてゆたでもぼくわしらがなわからんかたぼくわあのとときどやてかいたらいのかわからんかた

ぼくはこの二年間、先生と勉強してきた。今でも、もっと先生と勉強したい。ぼくは父さんがいなくても、さみしいのなんかは忘れてしまった。先生も父さんがいなくても、さみしいのなんかはみしくないでしょう。でも、ぼくはたまに父さんのことを思い出すとなみだがでる。父さんと山にいったのを思い出す。あの山へいったとき、柴切りをやったとき、子うさがいた。ぼくは追いかけた。父さんは追いかけた。ぼくはつかんでリュックの中へ入れた。先生がもしか引越したら、漢字を書かないで手紙を送ってね。先生が父さんのこと書けていった。でもぼくはひらがながわからんかった。ぼくはあのととき、どうやって書いたらいいのかわからんかった。

三十年も前に書かれた小学五年生の作文です。愛称をマッペと呼びられたこの子の父は、アイヌの猟師でした。マッペが小学一年

生の時、父は熊を撃ち損ねて殺されてしまったのです。

校長は、通夜にも、葬式にも参加しませんでした。たった一人で通夜に向いたマッペの担任は、憤懣やる方ない口調で、わたしに、そのことを教えてくれたものです。

教師の目の届かないところで、アイヌの子どもたちは、「アイヌ、アイヌ」とバカにされていました。自分がアイヌであることも知らず、「アイヌ」というさげすみの言葉を他人に投げつける子どももいる始末です。アイヌという言葉が「人間」という意味を担っていることなど、子どもたちは勿論、そのころのわたしも知りませんでした。

マッペの母は、アイヌではありません。混血のマッペは、彫りの深い特有の顔立ちを父から受け継いでいました。それは成長した彼の就職や結婚にとつての大きな障害になったことでしょう。

四年生と五年生の時、マッペは、わたしの組の生徒でした。受け持った時、驚いたのは、五十音の読み書きがほとんどできなかったことです。

少しずつ、わたしはマッペに五十音を教えていきました。ようやく呑み込めたと思われたのは、五年生も三学期になった時です。マッペのために、わたしは国語の教材を用意しました。オセーエワというソビエトの児童文学者が書いたものです。

長さも適当だし、漢字も易しいものばかりです。テーマも気に入ったものでした。易しい漢字にさえ、ふりがなをつけて、わた

しはガリ版印刷をしたのです。

だからわるい

一匹の犬が、体をまえにかがめて、はげしくほえたてています。そのすぐはなさきに、かきねにびたりと体をよせて、一匹きの小ねこが、毛をさかだててふるえています。カーッと口をあげ、ニャーオ、ニャーオとないています。すぐそばに、ふたりの男の子がたつて、どうなることかとみていました。

まだから、それをぞいていた女の人が、とぶようにして、かいだんからかけおりました。女の人は、犬をおっぱらうと、男の子たちをしっかりとつきました。

「あんたたち、はずかしくないの!」

「どうして、はずかしいの? ぼくたち、なにもしていないよ!」

男の子たちは、びっくりしたように、いいました。

「だから、わるいのですよ!」

女の人は、まっかにおこっていました。

プリントをみんなに渡すと、わたしは言いました。

「マッペ、読んでみな」

いきなりマッペが指名され、教室にざわめきが走りまわりました。これまで、ただの一度も教科書を朗読したことがなく、ただの一行も作文を書いたことがないマッペだからです。

一つ一つ、文字を拾いながら彼は読みはじめました。小さな声です。そんな小さな声で誰かが読もうものなら、たちまちざわめきはボリュウムを上げ、朗読の声はますます聞こえなくなるはずでした。

センセイの注意も待たず、ざわめきは、ピタリと止まりました。みんなは耳を澄ませ、マップの声を聞き取り続けたのです。

長い時間をかけて、最後の文字をマップが音声に変えた時、教室の中では、一斉に拍手がとどろきました。

マップの作文「せんせのこととぼくのこと」は、それから間もなく書かれたものです。そして、今、私は、マップ、許してくれという思いを込めて、これを書いているのです。

* * *

いくつかの学校をめぐった後、わたしは、アイヌ史ゆかりの土地の小学校にやってきました。シヤクシャインの殺された新冠です。

シヤクシャインは、アイヌ独立戦争のリーダーでした。寛文九年（一六六九）六月十四日にはじまったアイヌの蜂起は、前進、また前進を続けます。しかし、国縫川に陣取った松前軍の鉄砲隊によって攻守は逆転、アイヌ軍は押し戻されてしまいました。

十月末、松前軍は降伏を勧告——命は奪わないという約束を加えたものだったと記録には残っています。

シヤクシャインは降伏の勧告を受け入れ、松前軍の陣中に赴き

ました。そして和議の祝い酒だと酒を飲まされ、酔わされた上で、だまし討ちにされてしまったのです。十月二十三日のことでした。夕焼けのあざやかな土地です。頭のてっぺんから海の上まで、九十度にわたる夕焼けの広がりました。それは、まるでシヤクシャインの血のように空を染めて叫ぶのです。

アイヌ語では夕焼けを何と言うのだろうと思っても、アイヌ語を話せる人は身近にいません。アイヌ語は学校教育からはじき出され、ごく少数の老人や、心あるアイヌによって受け継がれているだけになってしまいました。

* * *

新幹線のホームに降りると、夕焼けの富士山は真正面にありました。

「こんなきれいな夕焼け、どこにもやあずら」
立ち止まって見上げている老夫婦がいました。土地のなまりが、わたしの心をゆるめてくれます。地球はまわり、夕焼けは、西へ西へと空を染め続けていくことでしょう。様々な土地が現れ、様々な人が、様々な言葉で夕焼けを讃えていくのです。それは合唱のように地球を包んでいるのではないのでしょうか？

地域語が地域語に潰され、民族語が民族語に潰されてしまうことは、地球を包む合唱曲が減びていくことです。それなのに、わたしは、アイヌ語を潰す同化教育の仕上げに、善意丸出しで加担してしまつたのです。

「女性の手による女性のための大工実技講座は、空間を確保するだけでなく、男性の価値観から解放され、女性の可能性を広げていく場として保証していきたい」

そんな想いを持って、再度、私は常設の大工道具教室

を開くことになった。

十年以上も前

になるのだが、

大阪で、女友達

と一緒に大工実

技の教室を開い

たことがある。

その時は、私

も友人も、自分

たちが教えられ

る技術・経験も

なく、ひよんなことから、教室を始めることになった。

内装の仕事を引き受けて仕事をしていた私たちの所に、一人のおじいさんが訪ねて来て、自分は大工仕事ができ

るのだが、女性に技術を教えたいと話し始めた。



私は、その前に、日曜大工クラブという会にも行って

大工仕事を覚えようとしたのだが、集まっているのは男性ばかりで、本で得た私の知識などでは差がありすぎた。

おまけに、モタモタしていると、親切心なのだろうが

手伝ってくれて、さっさと仕上げてしまふ。苦勞しては

じめて道具を使いこなすことができるのに……習うより

慣れる……私のペースでやりたい！

そんな気持でいた私と友人は、技術を学べると聞いて、

興奮した。お金もない私たちは、教室を開いて人を集め、

そのおじいさんに講師料を払うことにした。

場所を探し、人を集め、やっと教室を開くことができ

た。十年前も、今も、仲間が欲しい！女性の職域を広げ

たい！という気持ちに変わりはなく、教室で出会う女性

たちは、みんな、学びたいという願いを持っている点で、

私たちと一緒にだった。

ところが、回を重ねるうちに、ノコギリを使って木を

切っている女性の横で「大きなオイドして……」とか、

塗装の説明をしている時に「プスの厚塗りは見られたも

んじゃない……」などと言う、言動が気になり始めた。

そういう言葉や価値観から解放され、分からないこと

を分からないと言える雰囲気が大切だった。「女らしくない」と言われてきた足を広げるポーズこそ、ノコギリが上手に使えるコツだ。ノコギリを使いこなすためには、「女らしく」という価値観こそ、まず、切り捨てなければならぬ。プロの男性たちには、そのあたりのことが理解できないようだ。その男性講師は、私たちのこだわりが分からないまま、怒り、興奮し、訣別していった。

その後、私は二年半米国に滞在し、木工を勉強したり、米国女性の職域の広さを日本の女性たちに伝えるために、アンケート調査をしたり、写真を撮ったりした。それは、スライドにまとめ、「変わりゆく『女の仕事』『男の仕事』アメリカ報告記」として、あちこちで上映したり、貸し出ししたりしている。

そして、三年間、DIYアドバイザーとして働きながら、東京を中心に、公民館での移動大工実技講座を開いてきた。相棒の女友達とは、職業訓練校に交替で通って、木工や建築を勉強した。現在、開いている教室では、私たちが、木工やインテリア施工を教えている。

先日、私は十年前に開いた教室のことを思いだし、事の顛末を、お茶を飲みながら生徒さんたちに話した。す

ると、五十代半ばの女性が、「それはセクハラですよ、ねえ——」と周りの人を見回しながら言った。

私の胸の中の何がはじけた。時代は確実に変わっている。後戻りは、絶対にできない。知ること、学ぶことが楽しく、からだごと変わってきている私たちには。

●ハンディー・ウーマン連絡先

〒359 埼玉県所沢市寿町21-13
☎/Fax 0429-39-5877



地域の暮らして

家庭科教育

石川 尚子

九、子どもと遊び

(1) 子どもにとつて遊びとは

今の子どもたちの生活には、「空間」「時間」「仲間」の「三間(さんま)」がないと言われているが、かつての子どもたちは、遊び場としての山や川、空き地や路地を持つていたし、たつぷり遊べる自由な時間と年上や年下の個性あふれる遊び友達に恵まれていた。

「遊びをせんとや生まれけん、戯れせんとや生まれけん」という『梁塵秘抄』の歌を引き合いに出すまでもなく、子どもにとつて遊びとは、生活そのものであり、一人前の大人になるための学習の機会となつていたのである。また、どの時代の子どもたちも、空間・時間・仲間

をフル活用して、常に遊びに創意工夫を凝らしてきた。地域の遊びとは、こうした土地の人たちの知恵が集積され、自然環境や生活環境に育てられながら、親から子へ、兄弟から弟妹へと伝承されてきたものであると言える。

(2) 地域の遊び

ふるさと絵本づくり4年目(一九八三年)のテーマは「からこのあそび」であった。そのまえがきに「子供たちの成長に遊びは欠かせないものです。しかし、今の子供たちに、からだいっぱい使う遊び、自然の恵みいっぱい遊び場、そして遊び友達があるのでしようか。子どもたちにもつともつと遊んでもらいたい」と書いたのは、自分の子ども、近所の子ども、そして日本中の子どもたちの現実をみて感じた危機感がもたになつている。

その絵本をまとめるにあたって、アンケートをお願いした父母・祖父母たちの遊びは多彩であった。男子には「春(川遊び・ブツケ・ペーゴマ)、夏(魚とり・虫とり・きもだめし)、秋(木の実とり・虫とり・鉄砲やパチンコ)、冬(雪遊び・こま・たこあげ)」等があり、女子には「春(草花遊び・なわとりび・ままごと)、夏(川遊び・虫とり・魚とり)、秋(木の実ひろい・石け

り・かんけり)、冬(お手玉・あやとり・おはじき)」

等があつて、男女と季節にはつきりした区別がみられた。その他の特徴としては、身近なものを利用する遊び、からだを動かす遊び、手先の器用さを訓練する遊び、生活の知恵を学ぶ遊び、家の手伝いを兼ねた遊びが多かった。遊びの中の性別規範は反面教師とするにしても、子どもたちは、これから「生きる」「成長する」ものとの視点から、地域の伝承遊びを見直したいものである。

(3) 遊びと家庭教育

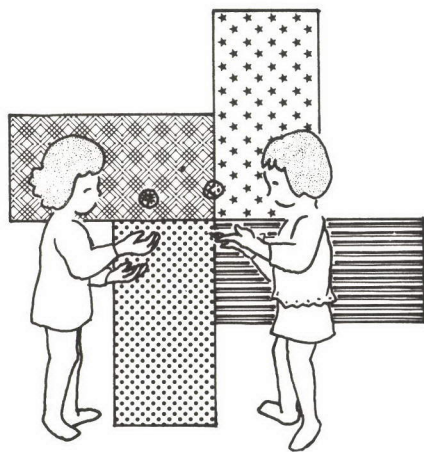
家庭教育ではこれまでも、保育領域や実習教材として、子どもの遊びや児童文化財を取り上げてきたが、残念ながら私自身の経験を含めて、遊び道具の製作だけでなく、精いっぱいという現実があつた。遊びというテーマを、もっと積極的に位置づけ、暮らしそのものを見つめ直すきっかけにすることはできないであらうか。

地域の遊びや手作りおもちゃには大変優れた教材となりうるものがある。そのよい例が「お手玉」であらう。

お手玉の製作には、布を用いた縫う技術の学習、端ぎれの活用、中身にした数珠玉やむくろじゆなどの暮らしの中での使われ方(むくろじゆは洗剤として利用されて

いた)、遊びながら歌うお手玉歌、作ったお手玉の活用など、切り口となるものがたくさんある。「お手玉をやって遊ぶ」という実践を通して、ものを大事にし、暮らしを大事にし、人間を大事にする生活のあり方が見えて来るのではないかと思うのだが……。

お手玉で遊ぶ



我が家の家事分担は、私が料理、妻が掃除・洗濯となっている。妻は料理がキライ（その気になれば作れるのだが……）、私は苦にならないので、いつしかそうなってしまった。保育園の時間は母親の勤務時間に合わせているため、妻が送り迎えしている。

朝一番に私が起きて、朝食と弁当を作りだす。子供が起きてくると効率が下がるので、大急ぎで下ごしらえをする。六時半頃子供（当時一才）が、しばらくして妻が起きてくる。ちなみに寝るのは私と子供が先で、妻は後から寝ている。睡眠時間は夫婦平等である。

わが子は、生後六ヶ月から毎週のように父子でお出かけをしていたため、お母さんより、お父さんのほうが頼りになると思っている。起き抜けに妻がダッコしようとする、と、「オトサンだけ」と私にダッコを求め、「困ったな」と言いながらも、内心「勝った」とほくそ笑んでしまう。

しかし、子供をダッコしながら料理をするのは結構辛いものがある。両手を使う時は、椅子を引き寄せて

男の子のおままごと

竹中かつみ

片足を乗せ、その片膝を立てた上に子供を乗せて料理する。わが子はコアラよろしくしがみついて、ジッとお父さんの料理する手つきを見ている。

ある日、妻が保育園で保母に言われた。

「空ちゃんは、ホントに料理が好きなんです。よく隣のクラス（二才児）に行って、あやちゃんとおままごとセットで遊ぶんですよ。フライパンを持つ手つきがちよっと違うんですよ。いつもお母さんの（作るの）を見ているんですよね」

これを聞いて、妻は何も言えず複雑な気持ちで帰ってきた。話を聞いて私は大笑いをしてしまった。

妻は「空君は、お父さんがご飯を作るのを当たり前と思っているけど、他の子とお話をするようになって、ヨソの家ではお母さんがご飯を作っていると知ったら、どう思うかしら。それに保母に（お父さんがご飯を作っているのが）バレたらどうしよう」と心配している。「理想の母親」をこなしていないという後ろめたさがあり、それを近所に知られると非難されるのではない

かと、恐れているのである。

「あのね、今はクッキングパパといって、料理の出来るお父さんがトレンディで、料理の出来ないお父さんは肩身が狭い時代なんだよ」と妻を慰める。

さて、＼おままごと＼の大好きな空君のために、二才の誕生日に＼キティちゃんのままごとトントン＼をプレゼントした。プラスチックの野菜の半分ずつがマジックテープで一つに合わさっていて、おもちゃの包丁で簡単に二つに切ることができる。レンジ、まな板、ナベ、フライパンもついている。

空君、箱を開けると大喜びで遊び出した。野菜を切ってフライパンやナベにいれ、レンジに乗せて点火つまみを回す。時々フライパンをゆする。おタマですくって小皿に入れ、味見する。お皿に盛りつけて、お母さんに「ドージョ」と持ってきた。その鮮やかな手つきに親二人で感心してしまった。

さてそれからは、朝のダッコが済むと、お父さんが御飯を作っているかたわらで、彼も御飯を作り出す。

子育てから見える風景

タオルをかけて寝かせていたヌイグルミをテーブルに座らせ、御飯を「ドーゾ」と食べさせている。

最初は、男の子の＼おままごと＼に内心「困った」と思った。しかし、よくよく考えてみると、＼おままごと＼は家庭生活の再現、真似である。我が家では、たまたま男親がご飯を作っていて、彼がそれを真似しているにすぎない。そう考えると、漠然と感じていた男の子の＼おままごと＼に対する違和感がなくなってきた。

この頃は腕に磨きをかけ、御飯だけではなく弁当まで作るようになった。私と妻の弁当の隣に「シヨラ君の弁当、出来た」とカラフルな弁当を得意そうに置く。

そろそろ三才になるので、＼おままごと＼ではなく、本当の料理を教えようかと考えているところである。

オホーツクの

潮風荒く…

江口凡太郎

二泊三日の宿泊研修

担任して初めての大きな行事である二泊三日の「宿泊研修」に行きました。子ども達の様々な姿が見えてきて、とても有意義な日々でした。「良い」点と「好ましくない」点の両方が見えますが、圧倒的に彼女たちの「良さ」が輝いて見えました。教室では、ほんの一面しか見えていないことを改めて痛感します。

行く前は、生徒にしてみると「規則」だらけの研修は「行きたくない」という声が多かったのですが、バスが走り出すと、底抜けに明るく、大はしゃぎでした。

「かったるいぜ！」と言われるよりは、こちらとしてもありがたいのですが、そのあまりの騒ぎように、年相応

に成長していない一つの現れではないか？とも思えて、素直に喜ばせませんでした。

「いえーい！」

片道3時間のバスは、行きも帰りともにカラオケで大騒ぎです。帰りには、とうとう歌うものがなくなり、校歌を歌い出し、驚かされました。本校生徒は、校歌を歌わせると、ボソボソ言う程度が日常です。子どもたちから歌いだしたのは意外でした。中心になって騒いでいた生徒が、「最後は、みんなでなんかうたおうよ！」と言って考え出したのが校歌だったのです。大半は疲れ切って寝ていましたが、自分たちだけ好きに騒ぐのではない彼女の気持ちですが、とても嬉しく思えました。

私は、好きにさせて様子を見て楽しんでいましたが、同乗していた教頭は、やめさせはしなかったものの、うとうとしかけては「イエーイ！」というかけ声にびくっと目をさまし、少々気の毒でした。

どのクラスもこの調子だとばかり思ったら、ほとんどのクラスが静かにビデオを見ていたと聞いて、ここでも素直に喜べないものを感じました。明るさと、やや高校生らしからぬ子どもらしさが、まず見えてきました。

ブーンブーン

「ブーンブーン」とドライヤーの音で目を覚ましました。朝の5時から、鏡の前で髪をいじくりまわしているのです。そういう子どもが、時間ぎりぎりまで、鏡の前でいつまでも「頑張ってる」いるのです。注意して見ていると、鏡の前を通る度に、じーっと自分の顔を見つめているのです。次の行動に移る度にこの調子なので、「はやくしろ！」と急がせると、「ふん」という態度です。

その中の一人が、よく見ると唇が「赤い」ので、本当はどうでもいい事ではありませんが、「規則」にしたがって、色付きリップクリームを取り上げました。「大人の女性にあこがれていた」というのが彼女の弁です。

日頃、用もないのに私に寄ってくる生徒がいますが、「鏡とにらめっこ」さんはあまり寄りつきません。寄ってくるほうが、話もできてありがたいのですが、どっちが「大人」かと考えると、「鏡とにらめっこ」の方が「憧れ」があるためか(?) 良くも悪くも、やや「おとな」びているように思えます。

「しーっ」

次も、高校生である彼女たちの研修での一幕です。日

頃、教室や集会で、とにかくじっとしてられない子どもがいます。授業でもマークされていて、担任の悩みの一つです。その中のひとりが、整列時に友だちを静かにさせていたので、わざとらしさみえみえかな? と思いはがらも、「今日はいいいところがあったぞ」とほめました。

その時の反応は「はあ?」という感じでしたが、その後、整列の度に「しーっ」と言っは、私のほうを見て、ニコニコしています。また、その日の日誌に「今日はいいいことがあった」と書いてきました。

これまでも、彼女たちと接するときにくっつか気にとめていることのひとつに、「これまであまりほめられたことのない子どもたちである」ということがあります。ほめられた経験の乏しさが、この他にも感じとられることがしばしばあり、厳しい状況の中で育っている彼女たちに心が痛みます。本当は、ただほめたのでは、鋭い感性で「わざとらしさ」を見抜かれ、その加減がむずかしいはずの年頃だと思えます。

今はこんな調子ですが、この先3年間の担任です。彼女たちとともに、自分も成長させながら努力していきます。

(紋別南高校家政科)

『家族』をめぐる(1)

東京都立稲城高等学校

蔵本佳子

■「共感」の時間を大切にしたい

今年度(平成5年)より男女共修家庭科が始まった。カリキュラムの編成には、それほど苦勞なく四単位を取り入れることができたものの、家庭科が教育上重要な役割を持っているという認識をアピールしていくには、内容がどう生徒たちに受け止められていくか、日々の積み重ねがものを言っていくだろう。その意味では、この記念すべき年の四月末日に産休に入るということは、せっかく新しく専任として加わって張り切っている若いMさんや同僚、生徒たちに対して申し訳なく思うが、やはり足掛かりだけでも固めたい。

初めに何を持ってきてスタートするか、これには悩ん

家
庭
科
遊
ゆ
う
感
あ
く

だ。性教育にいきなり入る商業高校の例などが都高教新聞に載っていて、面白いと思ったが、これは二年生からの実践であった。人間関係がまだできていない一年生では難しいのでは……。一番関心のありそうな「食物」、「家族」などが選びやすいかな、と思うが、自身の思い入れとしては、まず家庭科のイメージに意外性を持ってほしいなあ、ということがあって、そのための工夫をしたいと思います。

四月号で高橋巖さんにインタビューをしたことで、シユタイナーの教育論に、一層引き寄せられ、その中からヒントをたくさん得た。(「シユタイナー教育入門」角川書店より)一つは、「感性」を重視し、意識した授業。

論理的、知的方法をできるだけ避け、「感情」に共鳴していくような展開が可能なもの。生徒の知的要求を頼みに教材を作ってきたつもりだが、知的なアプローチをすればするほど、私と生徒の間の溝が深まるような苦しさがあった。力量不足はもちろんあるにしても、シユタイナーのいう「魂の喜びを感じながら学習する」には、感覚を働かせてものを見たり、感じたりする、「共感」の時間が大切なのではないか……そう思うようになった。

(高橋巖さん自身が、本ばかり読んで知的になっていた時期に、ドイツの恩師より「精神力が弱まってしまいましたよ」と言われた話も心に残った)

二つ目は、授業に「解放」と「集中」の両方の要素が欲しいと思ったこと。

生徒が関心を持たないのに、授業に無理やり集中させることに疑問を持ち、自由に解放的な空間を保証し、生徒の関心に合わせて授業を展開するように努めてきたつもりだった。解放のあとに静かな集中の時間もあるだろうことを期待しながら。

それが、気づいてみると、いつのまにか、集中することそのものを拒否するような雰囲気を作られてしまっ

ている。授業の内容に期待しない、真面目に考えた答えが返ってこない。ただ好き勝手に意見を言わせていると、収拾がつかなくなってくる。学ぶ喜びではなく、単なる息抜きの喜び。たまには深い気づきに出会う瞬間、緊張する瞬間があってもいいのではないかとがっかり。それでもごくたまにはあるが、生徒との呼吸がすつと合って集中に入っていく瞬間も全くないのではないのだけれど、とにかく弛みっぱなしで難しいのだ。

そして第三に、経験上大切にしたいことは、関係づくり、出会いの場としての家庭科の時間である。昨年度卒業した学年での取り組みのこと。二年生で「胎児診断」についての授業を組み立てた時、実際に障害を持って入学したKさんの意見をきっかけに、クラスを越えてさまざまな意見を授業展開に取り入れることができた。そのことで、自分の考えを多くの人に知らせる機会があったことを素直に良かったと言うKさんを見て、毎日顔を合わせながら内面では出会っていない生徒たちの関係を、改めて突きつけられる気がした。家庭科の時間、手問ひまがかかって大変でも、一つのテーマについてできる限り学年の人の意見を吸い上げ、それをまた生徒たちへ返

していく作業は重要な意味を持つのではないかと思った。

■なぜ「家族」なのか？

「家族」を扱うことに決めた。なぜ家族なのか？何よりも自分の意識が、その単元に向かっていたからだ。まず、三月の春のつどいで、ゲイの伏見さんに出会ったこと。異性をパートナーに選ばない伏見さんが作ってこういうとする家族、家庭ってどんなものだろう？

さらに、Weで以前実践を書かれた金沢の分校さんの「家族」を、私なりに勤務校の生徒向けに再構成したいと考えていたことが二つめ。分校さんは、家族とは何だろうという自分自身の単純な問いから出発し、「血のつながり」「婚姻」「同居」というふつうの家族が持つ定義がゆらぎ始めていることを、生徒と共に、さまざまな模索や現象から考察し、家族の意義とは何なのかを話し合う。多くの生徒が情緒面、つまり心の安らぎをあげるそこで、上野千鶴子の「ファミリー・アイデンティティ」の資料を使って、形の上だけではわからない、具体例からの家族意識についてふれていく。この流れがとても面白いと思った。分校さんの場合、「産まれる」「死

ということにも絡めて構成していたが、私は別の視点から、家族意識を考えてみたかった。（90年6月号、92年1月号）

そして映画を取り入れたいということが三つ目。さきほど述べたように「感性」を重視したいといっても、どのような方法をとるか、そう簡単には実行できないだろう。でも、映画なら、その楽しみも含めて、教室でもささやかな「共感」が生まれるような気がした。鑑賞の中に、脚本、セリフを味わう場合も入れてみたい。（今年2月、武田秀夫さんの市民講座「ミステリーを愉しむ」に出かけ、それがとても、とても楽しかったので）。

授業計画

- | | |
|----------------------|-----|
| ①オリエンテーション | (2) |
| 家族・親の育て方についてのアンケート | |
| ②小説の中の家族 | (2) |
| 『黄色い髪』 | |
| ③映画の中の家族 | (2) |
| 『チャンプ』 | |
| ④おにぎり実習と | (2) |
| ファミリーアイデンティティのプリント作成 | |
| ⑤映画のセリフを味わう | (2) |
| 「家族って何だろう」まとめ | |
| 新しい試みのゆくえ？と問題提起 | |

■家庭科の学び方をイメージする

授業について書く前に、オリエンテーションで紹介している学び方の一例について話したい。女子のみであった時も使って好評だったものだが、今年は男子も目を輝かせた！これは私自身の生き方の表現にもなったと思っているのだが、「布オムツ」に対するこだわりを実物を見せながら丁寧に説明する。

紙オムツ批判については、石油製品であるため資源やゴミ問題等のエコロジーの視点で一般的によく知られているが、それ以上に脳の発達と皮膚刺激との関係について学んだことが、私にとっては大きかった。ビデオの教材『さくらんぼ坊や』で有名な「さくらんぼ保育園」で九年前実習した折、園長の斎藤公子さんや保育さんから乳児室にて保育の意義・理論の説明を受け、私の保育観は一変した。子どもが育つという背景に、人間の気の遠くなるような長い進化の歴史があり、そこから保育を学ぶという壮大な発想に魅せられた。なぜ木綿のオムツなのか、木の床なのか、風通しのよい部屋なのか、水遊びなのか、一つ一つが実際に私の感覚を通して入ってきた気がする。すべてを揃えることは無理でも、せめて、長

い間人間の被服材料として使われてきた木綿のオムツに、私の思いを託したかった。紙オムツを全面否定できない状況もあるが、この体験談により、まず感性が土台になり、そこから理論へ、そして実際の行動へと結びつけていく家庭科の学び方をイメージしてほしかったが……。

生徒は案外緊張気味でおとなしい。だが、中には私の大きなおなかにさっそく目をつけ、「この先生妊娠してるんじゃないか——」と叫ぶ元気組も。慣れてくると、「先生、今俺がおなか蹴ったら産まれるか？」なんて言うから、「やあねえ、男の子ってそういうこと言っちゃうの？女の子は言わないよ、そんなひどいこと」。しかし、後でアンケートを読むと、この生徒はおおらかな文字で自らの親子の葛藤体験を書いてくれた。後日廊下で目が合って「ヨオ、先生、がんばって産めよな」だって。アンケートというのは、「家族」を考えていくきっかけとして、二年前の卒業生が子育てについて書いてくれた意見を読んでもらい、その感想や、親の子育てはどうあってほしいのかを聞いたものだ。その卒業生の意見の要約は次のようなものである。

私は教育っておしつけるものではないと思う。たと

えば、子供だって人間。人の自由というものはある程度必要。それをおしつける親は、基本的人権というものをわかっていない。親権というものもあるけど、親は中学校くらいまでは厳しく、その厳しさもある程度アドバイスするつもりで言ったほうがいい。そうすると子供も自然にそれについて考えらると思う。考えらるということは、自分の意見をしっかりとてくるということだから、度がすぎるといふようなこともしなないと思う。子供は親と友達のようにしたいのが望みだと思ふが、頭ごなしにおこる、子供もいやだけど、親も子を信用しなくなる。でも決してはなしがいにするわけではなく、なるべく小さいことも話すようにしたい。そうすると、今子供が何を考えているのか、すぐわかるのでは……でもたいへんよね、考えるより、行動するほうが。(15回生女子)

■「自由」「個としての生き方を貫く」とは

全体のテーマとして、高校生が今最も求めているであろう「自由」「個としての生き方を貫く」とはどういうことか、そしてそれが家族とどう関わっているか、考え

ていくことを設定した。アンケートを三クラス分読んでみると、子どもたちの親離れへの強い欲求や不安やら、自立願望がさまざまに表現されていて興味深かった。家を出たくて仕方ないものも少なからずいて、「やりたいことを自由にやりたい」「家のしきりから解放されたい」「とにかく親から離れたい」といったわがままとも甘えとも受け取れる意見。しかし中には「自分がどこまでやれるか世話にならずに試してみたい」という精神も見られる。それぞれの家族の在り方、本人の気性などで言い方も違ってくるだろうが、教師の期待に添って優等生的なバランス感覚で書かれた「信頼関係が大切」とか「親の立場も理解しよう」とか「友達のような親子の危うさ、親には威厳も必要」といった生徒自身のまとめ方を、こちらがそのまま受けとっていいは、深まっていけないのではないだろうか。親から自立したくてもできない、させてくれない日本の親子の意識、とでもいおうか、そうした親子のくい違いの広がり、家族の様相を内面から変え始めていることを意識できたら……と思った。(とにかく同世代の親子感覚を知らせたいと考えたので、主な意見をプリントして後日配布した。)

■「小説の中の家族」

二回目の授業は、アンケートの意見を二、三読んだ後、「小説の中の家族」ということで進めていった。干刈あがた著『黄色い髪』を題材に母と娘の葛藤シーンを味わう。この小説は、いじめ、登校拒否、学校拒否という現代の教育や学歴社会の矛盾をまっこうから描き、生徒にとっては重たい話になっている。さらに、その矛盾が母と娘の関係を壊し、二人は自分たちの周囲にはびこっている優しさのない、伸びやかさのない社会の重圧を感じながらも、それでも親子の関係を断ち切ることなく、やがて新しい自分をそれぞれ見つけ出していく。特に後半の、母史子から娘夏実に宛てた「手紙」、夏実が高校に行かない選択を穏やかに話す場面がいいと思った。そして、この小説は重すぎる気もしたが、受験を終え、さまざまな思いを抱きながら出会った生徒たちに、さらに内面で出会いきっかけ作りにもなるかな、と考えた。また、「個としての生き方を貫く」ことの障害として、学歴社会・企業社会のシステムにとらわれ、巻き込まれている側面を意識していくことにも結びつけられる。

しかし、こちらの思い入れと実際の授業とのギャップ

は大きかった。小説の抜粋プリントを作り、その説明だけでなく時間がかり、おまけに当の生徒たちは読みもしないで眠りの世界に……。でも、ありがたいことに、目先を変える象徴的な題材がこの小説の中に見つかった。尾崎豊の「卒業」という曲だ。尾崎の心の叫びを感じるだけでも、テーマを考えるきっかけになる。この時期、尾崎豊は一周忌ということもあり、話題の人物でもあった。また私自身も、彼についての新聞記事にあったコメント「現代人が失ってしまった自由と優しさ、倫理観がその曲にはある」に引き寄せられ、実際に歌声を聞き、魅せられつつあった。そして、いざ授業となると、一番生徒の表情に生彩が見られたのは、やはり曲をかけたとき。歌声をあげて手を叩く女子、一緒に口ずさむ女子もいる。後の感想に「尾崎さんにもっと生きていてほしかった。一緒に生きて肌で感じたかった」「尾崎の歌があるから私は今までいろんなことを乗り越えてこられた気がする」「他の曲も聴いてみたい」と書く生徒も。そして私自身も、思いがけず教室で涙が出てしまうというハプニングもあった。

この授業を初めて行ったクラスでのこと、とてもおと

なしいクラスで、極めて静肅な中で曲が流れた。小説の説明にも熱が入り、それをどう生徒が受け止めたかを確認する余裕もないまま、2限目の冒頭で曲をかける。私は自分の感情の世界に入っていたのだと思う。突然、学校を去っていった子供たちのことを次々に思い出した。進級できない決定を告げる夜中の電話口で互いに泣きあったM子、私を罵ったY、シュンとして「でも先生、俺が甘かった」とひと言い切ったJ。皆、「家庭」と「学校」のはざまで悩み、自らの進むべき道を選んでいった。

成り行き上、このクラスには涙の理由を話すと、静かに耳を傾けてくれた。でも他のクラスで泣くことはなかった。今度は元氣組が時々発言したり、てんでんばらばらの反応が見られ、集中しきれなかったたので、私の中にそんな心境は作られなかったのだと思う。余談になるが、「中学の担任の先生は尾崎が大嫌いだったので、高校の授業でこの曲がかかってすごく驚いた」という感想があった。この曲に対する教師の側の受けとめ方次第で「家族」の授業の展開の仕方、また生徒への接し方がずいぶん変わるような気がした。

『黄色い髪』の感想の中からテーマにつながっていくようなものを選んでおく。

尾崎豊に重心が移ったところで再び、尾崎の求めた自由とは何か、夏実と史子親子が葛藤の中で追い求めた自分自身の生き方について問いかけて、この時間を終える。

(次号に続く)

ウイ書房

東京都調布市西つづじヶ丘2-25-14
電話 3326-1380 振替 東京6-59867

新しい家庭科を
創るために

半田たつ子 編著

最後の章の半田さんの家庭科教育論は、七〇年代に書かれたものだが、九〇年代のいまにも鋭く響く。本のデザインは、本誌の表紙でおなじみの加藤由美子さんです。

「学びとは何か」という根っこの問いに、日々向き合いながら、山ほどある問題提起の直中にいる現場の家庭科教師への励ましを満載した本が出た。ウイ書房の『新しい家庭科We』十年の後半に掲載された実践の数々が、これからの男女の家庭科をつくる道しるべに。もちろん、これから家庭科教師になろうとする人にも、家庭科をもっと知りたい市民にも、うってつけの一冊。

—家庭科編集室

MEN'S 家庭科



《男たちのセンチク》
——中島清之

昨年の三月、大阪府立生野高等学校家政科への転勤の辞令を受けた時、困惑と戸惑いで私の頭の中はいっぱいになりました。工業の免許しか持たず、手話も知らない私にとって、生徒とのコミュニケーションがうまくいくかどうか、また、教師も生徒も全員女性の中、男一人が家政科という未知の世界に入っていくのかどうか、不安がありました。とにもかくにも新しい学校での生活が始まったのです。

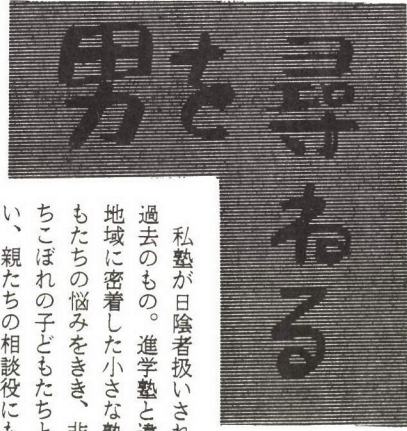
幸い、私が受け持つことになった教科は、食品衛生、栄養、食品、調理など、前任校である食品産業高校で携わっていた教科がほとんどでした。けれども、実際に指導してみると、思っていた以上に難しく、四苦八苦の状

態が毎日続きました。生徒一人一人が、自立して生活できることをめざしているのです。調理実習の時は、まず、買い物から始まります。しかし、健聴の人に手話は通じませんから、買い物の際、自分の意を相手に伝えることすらひと苦労なのです。経験が少ないので、ほとんど一から教えますが、口で説明するわけにもきません。まず慣れない手話を使って説明し、それから調理をやってみせるといように、ゆっくり時間をかけながら行うのです。危険なことがあっても、大声で「危ない！」と言っても駄目、その生徒の前に行って机をたたいて止めます。一年間いろいろな経験をしましたが、実際にやってみると、家庭科の免許の必要性を感じ、さらに聾教育の中で家庭科がめざす生活の概念を生かしていく魅力を感じつつあります。調理をやり終えて試食をしている生徒たちの嬉しそうな顔を見ると、これでよかったのだと自分で納得しています。

聾学校においては、特に、自分で生活できるようにするということが大切なのですが、それを男の教師としての独自性を生かしながら指導していくことに魅力を感じています。

天野秀徳

さん



私塾が日陰者扱いされるのは過去のもの。進学塾と違って、地域に密着した小さな塾が子どもたちの悩みをきき、非行や落ちこぼれの子ともたちとつき合っている。親たちの相談役にもなっている。

塾はよろず屋

聞き手

佐々木賢

野次馬／池見恒則 斉藤悦雄
武田秀夫



□あまの・ひでのり
一九四六年生まれ。無類の競馬好きで、馬好き。そのためか、顔まで馬に似ている。中野で中央学習会という私塾を経営。何度かつぶれかけたが、そのたびに、卒業生や父母らが存続をはかって運動し再建、現在に至っている。夜の大人塾も主催。この塾は地域のカルチャーセンターにもなっている。

意識しないで家事をする

佐 アマちゃん、朝食を作って、家族みんなのお弁当も作っているんだってね。

天 うん。なんとなく、そういうぐあいになっている。

佐 最初からそうしてたの。

天 いや。血圧の関係かなあ。僕は高血圧で朝早く起きられるからね。必要にかられて、自然にやるようになってしまった。前は「してやってる」って感じだったけど、

「お互いに、するのはあたりまえじゃない」とかいわれて、やっぱりそうかなあと思うようになってきた。それに、子どもたちが、「今日のお弁当、おいしかったよ」なんていって、おだてるからね、体が動いちゃう。

佐 彼女の影響もあるの？（秀徳さんのおつれあい天野千穂子氏は大学のフランス語講師。J・クリステヴァ、

「女の時間」△勁草書房Vの訳者。この本は、西欧的主体を問い直し、中国太古の母親像をも意識して、男の解体へ向かうという、新しいリブの観点を提起している）

天 そうね。でもこういうのって、対等性とか、思想とか、フェミニズムとか、あんまり関係ないみたい。初めは分担のことで、彼女とやりあったりしてたけど、育児

っておもしろいでしょ。僕はおもしろかったなあ。三〇パーセントは自分でやるようになり、後の七〇パーセントはいわれるからやるといった感じだったね。

ほら、七〇年代の全共闘世代の男って、初めは「平等であるべき」とか、主体とか民主主義とか、言ってたでしょう。それが、「集会があるから僕はある、重要な会だから」とか言って家事をしない。いくら理念を言ってもダメなんだな。頭で考えるのはダメね。「女がこうだから、男もこうすべき」というのは、僕には十分の一もないなあ。女と男の関係性というのは、女の人が考えていても、男の思いはそこまでいたらない。そういう負の部分の関係の方がおもしろいじゃない。

佐 おもしろいというのは？

天 だから、男と女が権利的に対等で、数値で五分対五分であるところだけで考えるのはよそうよ、ということを言いたいわけ。「女は不利だ」とかいいうのじゃなくて、発想を転換して、「なんで、一緒にいるの」という問いを出して、それを認め合うしかないわけじゃない。つれあいの片方が「犠牲になっている」という意識で続く関係は不幸だし、現実には妥協しながらやっていくわけで

しょう。そのうち関係が変わっていくわけで、大きな社会的関係は変わらないにしても、個人と個人の関係が変わればいいわけでしょう。育児だって男が観念でしかわからずにやっていたりすれば無理がくる。そうじゃなくて、時間がたつうちに分かりあって、あきらめも含めた皮膚感覚でするようになる。僕も意識しなくて、自然に家事をする時点というのがあったように思うもんですね。でも好き嫌いもあって、掃除は全くしないし、今晚こうやって飲んで楽しんでる自分の姿は昔と全く変化してないと感じる後ろめたさ、負の部分への意識もあるんだよ。

佐 なるほど。それで子どもは家事をやっているの？

天 ダメだね。上はもう二十一歳の大学生、下は十六歳だけど、二人ともさっぱりやらないね。父親が家事をやったら、その後ろ姿を見てやるようになる、というのはウソだね。

佐 ウソだね。自分の相手ができた時点で、また勝手に関係作りをするんだらうね。

塾はよるぞ屋か宗教家

佐 アマちゃんが塾をはじめたのはいつ頃から。

天 僕は七十年代の初め、大学院にいたんだけど、その

頃、小岩で進学塾をやっている友人がいて、手伝ってくれということだね。だけど、勉強というより、子どもと遊んでるほうが楽しかった。そういう僕のスタイルの塾をやっていくようになり、そのうちに経営権を譲ってもらって、この中野に移して、中央町だからその名をとって中央学習教室として、そのまま現在まで続いてきた。

佐 今、何人ぐらいの生徒さんがいるの。

天 塾生は七〇人くらいかな。全盛期には一〇〇人ぐらいだったけど。アシスタントは六人いる。

佐 小さな私塾の意味って、何なのだろうね。

天 自分の存在は何か、ということを考えてみるとね、進学塾は専門家だけど、僕らは専門家じゃないんだね。勉強も教えているけど、進学のプロじゃない。それに不登校のことも非行のこともちょっと知ってて、障害者もいるけど、でもそれぞれの専門家じゃない。

齊 おれたちのやっていると、それなりに専門性があるように思われているぜ（斉藤のエッチちゃんも、アマちゃんと同じような私塾の教師）。

天 父母とかに地域で相談されることが多くて、その時、相手からは専門家と思われているかも知れないけど、む

こうが勝手に思ってるだけで、それは幻想だもんね。つまり、よろず屋なんだね、我々は。

ケンさんが「学校は恐喝みたいなもので、塾は詐欺みたいなものだ」って言ってたけど、このごろ、本当にそう思う。なぜ人が来るかって、つきつめたら来られないもんなあ。それでも「ここへ来るの楽しい」とかいつて来る子どもたちもいるからね。

武 隙間産業なんだね。

天 よろず屋というのは、学校と大手の教育産業を映し出す鏡みたいなものでね。「学校へ行くところなるよ、進学塾へいくところなるよ」と説明することができるところに権力がないから、両方の姿がよく見えてくる。で、両方の姿を見せたりするから、親が幻想を持って、子どもをよこしたりする。それも迷っている親がね。もしかししたら僕は宗教家かもね？

佐 アマちゃんはなんでも相対化して、しかも総体的に見えるんだね。

天 地域の塾からいろんなものが見えるんでね、今まで良心的教育者の中で「あたりまえ」と思われてきたこと、自分もそう思ってきたことも、「本当にそう？」と疑っ

てしまう事例に多く出会うから。例えば、「進学塾は悪い」とか「学校の体罰は悪い」とかいうけれど、そのいい方が絶対とは思えない自分がでてくるわけ。ツッパリの子どもがいて、一緒にやっていると変わってくるけど、「ツッパリの子はこうですよ」という一般化でその子どもが存在を断定しないことにしている。

武 学校のように一斉授業じゃなく、マンツーマンでその子にに応じてやるからね。そういう塾としての思い入れがあったけど、今の時点では、その思い入れも変わっているんじゃないの。

天 塾としての思い入れは、八杉さんと一緒にやっている時は強かったけどね。（八杉晴実、一九九〇年没。『塾は学校を超えられるか』三一書房、『子ども支援塾のすすめ』太郎次郎社、『全国子ども支援塾ガイド』一光社等の著作があり、私塾の教師の研究会やネットワークを組織する。アマちゃんは彼の右腕だった）

今はその思い入れが変わったと思う。△怠学▽、△嫌学▽など消費社会化による状況の変化もあるし、自分が歳をとったこともあって、若さで付き合うのもダメになってくるしね。先にも言った、専門性のないところに、

塾の意味があると思うようになった。

塾は黄昏か

佐 で、そういう私塾の将来はどうなるの。

天 『塾の将来?』ではないんだな。自分を含めて、人間がどうなるかが知りたいわけ。子どもたちが来なくなると困るんだけどね。そこは少数派だから大変なんだけど。例えば、「子どもたちの居場所」といういい方があるでしょう、でも、居場所だけではないんだなあ。どこかへ行かないと不安があるから来るわけで、塾としてはその不安に応えるカウンセラーの役割もしてるわけね。ただし、そのモヤツとしたものに、モヤツと応えるだけで、スッキリしない所で私塾が成り立っているんだね。八杉さんが死の直前に言っていた「かけがえのない関係の塾」「ビューティフルな塾」ともちょっと違ってきている。ケンさんのいう「教育無化」につながるものがあると思っっている。

佐 でも、メシ食っていかなくちゃならないでしょ。

天 そこらへん、どう考えたらいいのかなあ。「教育は金ではない、聖域だ」という考え方が一方であるでしょう。でも、僕は金もらうの当たり前だと思っっちゃって

るよ。そのかわりに、知識を買う人と売る人が対等な立場に立つという関係があればいい。江戸時代だとそういう関係があったのに、明治以降になってから逆に、資本の営みをカムフラージュするために聖域意識がでてきたんじゃないのかな。相談でもなんでも、仕事をしたら金もらってOKだと思ってる。

武 従来のように学校対塾という対立図式ではダメでしょう。反教育とか非教育の概念もでてきたしね。

天 よろず屋だから、学校のフォロワーの部分もあって、学校があつてこそ塾があるという現実もあるよね。でも気分は学校を意識しないし、リースクールも意識しないし、やっぱり、子どものありようから出発しているということだね。塾をやっていると、十年二十年というつき合いをすることになるからね。結果としてそうなるんだけど。それが大事だからというのではなく、そういうつき合いが身についてしまったわけ。良いとか悪いとかは別にしてね。教育理念なんか絶対的なものなどないもんね。競馬と同じように。

佐 それで、塾のたそがれ性の問題はどこへいっちゃったのさあ。

天 塾生の数が少ないと困るね。ある程度来ないと世相の多面性が見えないから。

武 職人的感覚なんだねえ。夕方、子どもたちがくる。

その子がつこりして、また次の日に来てくれる。経営としてよりも、哲学みたいなものでね。子どもとつき合うというのが人間とつきあうということだしね。

池 塾をやっている結構人間関係が広まるもんね。登校拒否なんかもいて。で、アマちゃんの場合、最後の一人でもやるわけ？（池見さんも私塾の教師。塾生が十人から三十人程度で生活できている不思議な人）

天 一人じゃ困るね。十人でもダメだね。競馬ができないもん。競馬の費用と生活費があればいいけど、そこらへんの兼ね合いの問題だね。例えば、技術の進歩でも、便利になるという側面と、公害や資源の問題で進歩への疑問が生ずる側面があるでしょう。今後ともその兼ね合いが問題になる。塾というのはバブル時代に詐欺の可能性があって、それでやってきたようなものなんだなあ、とこの頃つくづく思うもんね。成績が上がるか、いい学校へ行けるか、大検に受かるかなど、選択する側の吟味、つまり対価獲得がシビアな今は厳しいよ。

佐 自分の思想と生活の関係はどうなの。

天 自分の生き方と生活は対立するものじゃないと思うのね。経済性の問題だけでいくと、生活の心地好きみたいなものを基準にしちゃうでしょう。その心地好きを失いたくないから営業努力しちゃう。そうじゃなくて、楽に生きられる思いのほうを重視するわけね。僕の場合、競馬ができる程度という生活だけど、それができないなら塾をやめちゃって、競馬オンリーでいくね。予想屋でもやって。予想屋さんに「甘くねえぞ」って怒られそうだけど、賭けるほうは負けてばかりで自信がないから、結局、詐欺やって生きていくのかなあ。

佐 ウーン。肩をはらない姿勢なんだね。

武 僕はね、塾でいえば、中間のやつが衰えて、大手の進学塾と小さい塾は残っていくと思ってる。

天 いくら子どもが少なくなっても、進学塾にいかないし、行けない子どももあるもんね。塾の中で子どもが見せてくれる姿があって、その姿を見て社会状況や人間を哲学していきなあと思っているわけね。（左腕に、中学生と交換したプロミスリングをつけている）

カットを描く。わずかの時間を見つけては描く。描くための特別な時間を持つことはほとんどないし、現実問題としてそんなゆとりもない。いつからこんなことをはじめたか振り返ってみても、ちっとも思い浮かばないが、高校時代のノートを見つけたので開いてみたらすでにあちこちの空白に描かれてあった。退屈を紛らすため、また眠気を覚ますために手を動かしたのだろう。

現在はいっ描くか。まず一番多いのは会議中である。教師の世界には、実にいっぱいこの会議がある。職員会議にはじまり、学年会議、部会議、組合の会議、その他諸々。生徒が事件を起こすたびの臨時の会議もある。いや、会議を減らそうと論議する年度末の反省会まである。私は会議室に会議録と筆記用具を持ち込む。まずは普通の姿である。が、発言の内容をメモし、自分でも時々発言しながら、資料として渡された葉半紙の裏にカットを描きはじめる。あまり大きな声ではい



カット／佐藤通雅

えないが、司会しながらだっぴそかに手を動かす。今号のカットもその産物だ。退屈で長くかかれればかかるほど、「芸術作品」はいっぱい生まれてくるというわけである。第二に、仕事をしながらまた外を歩きながらちょっとした気に入ったものが見つかると、一気にスケッチする。いつ見つかるかわからないから、いつでも対応できるように机の前と車の中、リュックをしょって自転車で通勤することもあるからリュックの中にもスケッチブックを入れておく。半紙を綴じた自家製のものであるが。変わったのでは、ニューミュージックやロックを耳で聞きながらその印象を絵に写しとるなどということもやる。

こうはいつでも自分のは素人の手すさびだから、なんの構想もなく、ただ出任せに手を動かすだけだ。で、時々手が自分の意志と関わりもなく勝手に絵をどこからか引っ張り出すという心境になる。これはいったいどういうことなんだろうと不気味な気さえするが、いまだに分らない。それから同じ系統、たとえば鬼とか女性とか石ころとかを立て続けに描くが、どういうわけか五六枚も描くとすっかりいやになりこれ以上は苦痛になってしまう。プロとはこの苦痛を生活のためにがまんする職種のことだとなつくづくと思ひ、プロでないことのさいわいをかみしめる。

二年前に『学校はどうなるのか』という本を出したとき、編集者と装丁者が私のカットとマンガに目を留め、本のなかに収録してくれた。プロに「なかなか味のあるイラストだ」といわれて、イラストとカットとマンガの違いもわからない自分は恥じ入った。本が出て、何人かの知人に「文章よりマンガの方が面白かったよ」といわれて、大いにくさってしまった。

最近になって気づいたが、この頃カットの生産量が少ない。どういうわけか生徒の事件が激減して、臨時職会もほとんどなくなってしまったのだ。

木を植えた日

—ほうせん花のひと

蒔田直子

カット／吉村美加

皇甫^{フアンポ} 任オモニ^{イム}（おかあさん）は今年73才。70才を過ぎて、初めて建物の中の仕事をした。公園の清掃からバス会社のビル清掃の仕事へ。「何とまあ屋根の下の仕事がありがたいこと。雨にうたれることも、陽に灼かれることもない。荒いことばに慣れっこやのに、朝は社員の人が、おはようて言うてくれはる！」

もしも生きているうちに「先生」と呼ぶ人があるのなら、皇甫オモニこそ、その人だ。13年前、オモニは、私たち

が京都の東九条で開いている「九条オモニ学級」を訪ねてこられた。在日朝鮮人一世の女性たちに、日本語の「読み、書き」を伝える小さな夜の学校である。一世の女性たちが日本に渡ってから半世紀を越える時間が流れた。その間くり返された「食べるだけで精いつばい」の労働の日々。今日もオモニ学校は、60才を過ぎ、80才を過ぎても暮らしているこの文字を「読みたい、書きたい」オモニたちの熱気でムンムンしている。熱気にはわけがある。文字がわからないつらい思いは、オモニたちが積み重ねてきた差別の体験の中でもとりわけ「家族に話したこともない」ほどのしこりとしてからだの中に残っているから。

オモニ学校には他の学校と違うことがいろいろある。文字を教える人はいが、ほんとうの「先生」は実はオモ

ニたちだということ。「正しい日本語」はふりかざさない——オモニたちの使う日本語は、母語である朝鮮語と関西弁が入り交じった独特の「オモニ語」であり、それは私たちの使う日本語が、ハッと立ちすくむような素晴らしいコトバだ——。卒業がなく、途中で一休みもできること。

私も、出産や自分の生活を立てるのに精いつばいだった時、長いこと「休学」したが、そんな時でも皇甫オモニ^{フアンポ}はいつもそばにいてくださった。風邪をひいたといえ、鶏一羽をぶら下げて来て朝鮮人参と煮て。引越すと言えば、いそいそと焚き物を携えて、移り先の部屋に不思議なおまじないの煙が流れる。うちの朴^クさんのオモニは、私たちが一緒になる前になくなったが、二人の娘たちは一世のハルモニ（おばあさん）の濃厚なスキンシップを存分

に浴びて育つことができた。オモニとの出会いを思うと、神様を信じない私でも手を合わせて祈りたくなる。

五年ほど前、いつものようにはかんで、オモニは二冊のお厚いノートを私に手渡した。——ちよっと書いてみたんやけど、読んでな。

故郷を出てから四十八年 昨日のことはよく忘れるのに／なぜか幼いころの思い出があざやかに目にうかぶふる里の親兄弟は心のささえてましたこんな書き出しで始まる膨大なオモニの自伝。＼じぶんの心をなぐさめる＼ために、十代の頃から広告紙や、時には地面の上にハンゲルで書き綴り、書かれた紙や土が消えてもオモニの心とその文章が刻みつけられ、孫たちに伝えたい思いで十年の時間を費やして、日本の文字へと書き換えられていった記憶。その晩、夜が明けるまで震えな

がら読み、この宝を何としても世に出すと誓った。オモニ学校の仲間たちに見せた。一人ではできなくても、何人かの人間の一念というの恐ろしいもので、三年前オモニの自伝は「11月のほうせん花」（怪書房）という美しい

月のほうせん花を語る集い」を開いてくれた。知らない町、百人近い人たちの前で、オモニは藤色のチマ・チョゴリに身を包み、臆することがなかった。インタビュアーの役で隣に座りながら、何度もオモニの詩の一節が浮かんで、



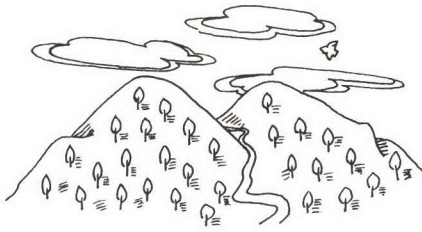
本になって、たくさんの人に読まれた。

この五月、私は自分が生まれ育った静岡へフクノ皇甫オモニと旅した。オモニの言った一言——一度富士山を見てみたい。それを伝え聞いた両親や高校時代の友人が、それなら！と奔走して「11

頭が空っぽになった。

一年草のほうせん花は かぎられた土の上で／はじつけてこぼれたたねから二度咲く／11月なのに いっしょうけんめいに／咲きつづける美しいほうせん花

気のカレンダー



二〇年住んでいた沖繩から東京に来て、まず感動したのは四季の移り変わりでした。山に行くときさらにはつきります。日本列島を梅雨が走り、緑なす草木の夏となりました。

私は青春の苦痛を、登山によって通過しました。東北は朝日連峰、白神山のブナの原生林……山水画のような山懐の端に立ち、自然のつきないやさしさ温かさに癒されました。

本誌六月号にお花屋さんの永野さんのお話がありました。「僕達は元気になっっていくということを、お花から与えられている。……いろんな、植物から生かされている」。そこで「うんうん」と大きくうなずいた私です。

野辺の一輪の花、森の奥深くに立つ大樹も全ての草木がさまざまな交流をしています。もちろん私達人間にもメッセージ（気）を送って下さいますよ。

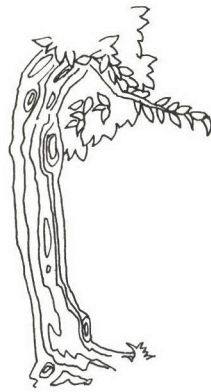
「木霊」という言葉はそこからつけられたのではないかという説もあります。そう考えると、ハイキング等がもっと楽しくなりますね。ところが、人間関係と同じく、メッセージは相互に呼び合わないと、そのまま通り過ぎ、気づかないことも多いですね。

さて今回は緑の樹木さんと交流する〈樹林気功〉の話です。

森の中、あるいは神社や公園をゆっくり歩いていると、ある時どこかで「オーッこれは！」と感じる、お気に入りの樹と出会うことができます。その樹と向かい「よろしく」と自己紹介をして、枝の先ぐらいの場所に立ちます。気功の中には、太極拳等の「動功」といわれるものがありますが、すくっとただ立



文・伊野波ひで子
絵・作間恵理子

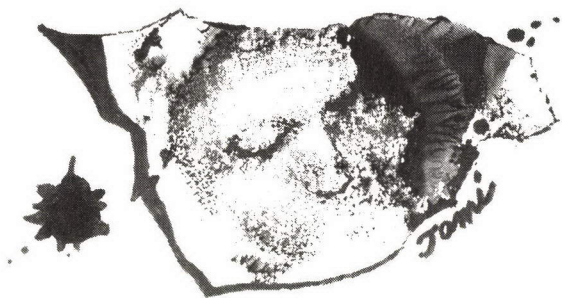


つだけの〈站^{たん}桩^{こう}功〉は座禅等と同じく「静功」の中にはいりません。

まず始めに以前紹介した按摩功、両手をシヤカシヤカとこするところからいきます。体の内側からホカホカしたものが生じてきますよ。そして両足は肩幅に開いて站^たち、腰を少し地球の方向におとし、かるく膝が曲がったようにします（これが難しい方は、何も考えずに、ただ立つだけでも良い）。つまりは湾曲している脊椎を一本の線に伸ばせば理想的なわけです。両手は軽く腹の前で広げて、ふわっと気の玉を抱くようにします。その手をゆっくり開いたり閉じたりします。ゆっくり。眼は軽く閉じ、ポーッと、風が来れば風の音を聴き、鳥が鳴けばそれを味わう、無理に雑念を消そうとする必要はありません。

しばらく站^たっている点で、手の平に受ける、あるいは体に受ける感触が変わっていきます。時にはビリビリと、時にはビーンと。站^たつ位置によって感じが変わります。時々移動して最も快い場所を選んで下さいね。そこは相手にとっても、おそらく快い場所のはずですよ。そこで、静かに味わってみる、いつの間にか好きな樹木に語りかけている自分を発見すると思います。それは、同時に、自分の内なる世界の一本の樹に話しかけていることにもなるんですよ。「人間は特別な存在である」という意識に囚われていると、多くの感受性を枯らしてしまいそう。万物斉同といいますが、植物も動物もいのちの基本物質は同じなんです。

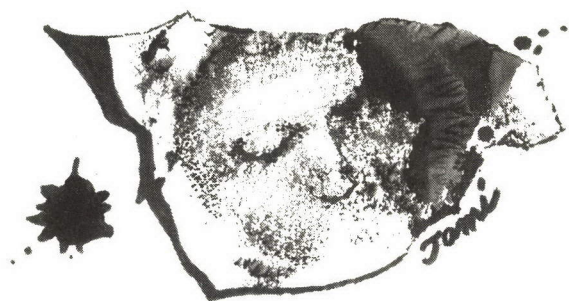
梅雨明けは緑の森で樹になって、風に吹かれてみませんか。気がついた時は、森の中の一本の樹になっているなんてどうでしょう。



放浪者や単独者、あるいは都市における遊民となって家族から離れ、逃走していった男たちに、十九世紀的なブルジョア家族の中に置き去りにされた女性たちが、やがて現代フェミニズム文学にその表現を取り戻して登場してくる主役となっていく。

それに先立ち、あるいは並行して、イギリスやフランス本国からその植民地へと流出していった、植民者の家族の中で育った女性たちが、異色な感性を持つ文学の書き手として活躍している。十九世紀半ばから南アフリカ独立運動に深くかかわり、日本の『青鞥』の人々にも刺激と影響を与えた『女性と労働』の著者オリヴ・シュライナーや、一九七〇年代のフェミニズムのバイブルとも言われた『黄金の手帳』の作者ドーリス・レスティングがそういう作家の好例である。

シュライナーは、男まさりの母親と夢見がちで生活能力に欠けた父親という家族の中で育った。生活のために仕事をしながら子供たちを教育し、家族を守る母親は、娘の能力を早くから



見出して勉学と自立を奨励した積極的な女性だったが、黒人をまったく信用しない白人中心主義者でもあったという。シュライナーは、一面で既成の性役割を壊した生き方をしながら、それでいてイギリスの古い道徳観や人種差別を頑なに守ろうとする強い母親との葛藤の中に、医者への志望を強め、また、アフリカと黒人を愛する（癒しの作家）として成長していく。

ドーリス・レスリングは、その成長期を第二次世界大戦後のアフリカ史の真只中で過ごすのだが、南アでの独立運動や、そこでの共産主義者への幻滅を、個人的につき合い、愛した友人や恋人や夫との関係を通して経験するという、女性にとっては現代思想史そのものの経験をすする。レスリングの南アでの女性への成長を扱った自伝的小説『マーサ・クエスト』シリーズには、古いイギリスの家庭とその価値観をそのまま継承しようとして、無為の生活のうちに内部崩壊を来して行く主婦たち、母親たちの姿が、グロテスクな異形として描かれている。

『黄金の手帳』は、人種差別や植民地問題、共産主義思想など、現代史の問題があくまで個人的な男女の性的関係、親子の関係、そして女性にとっての自己表現の問題として、その視点から考えられているところに、この小説がボウヴォールの『第二の性』に次いで新しいフェミニズムの基本的なテキストのひとつとなっていた理由があるのだろう。その視点は、〈本国「内地」〉という文化の中心にいては、女性自身がなかなか持てなかつたものだったのである。

一九六七年、ロンドンに滞在した時、私は二歳半になる息子を保育園に預けて、近くのケンジングトン図書館で午前中を過ごすのが日課だったが、そこで偶然に『黄金の手帳』を見つけ、私にとっては未知の作家のその長編小説を一気に読んだ。レスリングはその頃、すでに『マーサ・クエスト・シリーズ』を数編書いていて、そのひとつは映画化もされていて、すでに一部では知られた作家であったが、レスリングの名が多くの人々に知られるようになるのは、



アメリカでフェミニズムが文学批評に取り入れられ始める一九七〇年代になって、『黄金の手帳』が多くの異なった民族的・文化的背景を持つ女性たちに共感を持って読まれるようになってからである。ロンドンを舞台に、女優と書けない作家の恋愛や結婚や離婚や性や家族の関係をテーマとした『黄金の手帳』は、その当時のイギリスではあまり評判が良くなかったらしいし、レッシングは、政治とマルクス主義に失望した、ローカルカラーの植民地作家としてしか知られていなかった。

本国イギリスにとっての周縁文化を形づくる〈外地〉である植民地の視点から、母国という中心文化、とりわけそこにおける性や家族や男女の関係のあり方を批判し、その欺瞞性を描いた作品には、例えば、E・M・フォースターの『インドへの道』がある。フォースターがホモセクシュアルであり、イギリス中産階級の偏狭な性概念と道徳主義に生涯抑圧されつづけた作家であることを考えれば、『インドへの道』がラディカルな問題意識を内包している作品であることが納得できる。イギリス文化の中の異邦人であるフォースターにとっては、インドという外部の視点の導入は、自然でもあり、必要不可欠でもあったのだった。

しかし、オリヴ・シュライナーやドリス・レッシングにとっては、植民地という外部は、たんに本国という中心文化を批判するための視点でも、また周縁文化の象徴でもなく、ぬきさしならない自己形成の場であり、とりわけ〈女〉に成長していく場なのであった。そのような女性作家が、制度や思想や家族・性関係にたいして、ひとつの文化にとらわれない、女としての視点を持ち、それを表現したこと、また彼女たちの作品が、イギリスにおいてよりも、世界のあちこちにおいて、より多くの読者に共感を持たれるようになったことは、当然であった。

老いの途々、だんだん子どもにかえるときよく言われているのを、人間として無垢にかえるといったニュアンスで漠然と納得したいところがあって、じゃあ何とぐらいいまでいって「ジャアネ」というのが幸せなかなア、とか思っている折々がある。

田舎の兄のところまで生母が84才で逝ったのは、自分の子がヨチヨチ歩き可愛いさかりの頃だった。3〜4才ぐらいいかなとおぼしき、母の童女がえりのエピソードを

伝え聞きつつ、わが子に重ね合わせながら育てた。通

夜の話題のほとんどが、どこかアクの抜けた可愛らし

いエピソードで満たされた中にいて、私は、何年もの看とりに関わった人々の精一杯の優しさに浸った。

幼なじみの友人の母上は、ここ何年か「20才」をやっているという。明治30年生れの人の20才だから、気分は大正時代の真ん中を生きておいで、ということなんだろうか。芸者さんだったという。養女としての絆で世話をしている旧友は「あなたは どうして私のことをお母さんと呼ぶの？」という関係の明け暮れなのだそう。愛



コソニチワ 福祉さんご在宅？

〈気配の福祉さんたち〉

若竹キミイ

の地域ケアの話聞いたとき、家族でも友人でも、お

年寄り本人を昔から知っている人を必ず加えてのチーム編成を大切に、その人が家に暮らす時も、病院などの施設に入る時にも、ケアチーム（4人位）をそのまま移動させると言っていたのを改めて思い出す。当事者の生活の継続性を重んじることが、ケアの基本に据えられているのだ。

お年寄りの施設を訪ねた時に、「ここはどこ？私は何だれ？」みたいに居る人を見るのはやだ！と思う。

東京 向井豊昭

We 6月号は、面白いものがいっぱい。
わたしの好みでは、お花屋さんとのインタ
ビューが一番気に入りました。お見舞いの
花を買いに着た女の子に「あなたがお花」
だなんて言ってしまうお花屋さん、永野博
之さんの心がうれいす。そう言えば、
この三月、わたしも子どもたちの顔を見て、
自分の顔の筋肉が思わずゆるみ、にこにこ
と笑ってしまったことがあります。三年
前、産休代替教員として過ごした小学校の
子どもたちが卒業することになり、謝恩会
に招かれたのです。学校が近づく、顔の
知らない子どもたちの群れと出会いました。
一年生のようにです。わたしのにこがは
じまったのは、その時でした。あれは花だ
ったのですね。学校は花屋さんなのです。
植物の気ということを永野博之さんも、

伊野波ひで子さんもおっしゃっています。
編集後記では、有坂さんも書かれているの
に、わたしがここで言うのはくどいと思ひ
ます。が、どうしても言いたかったので、しば
らくつきあってください。

六月のはじめの休日、わたしは新幹線の
定期券を使って熱海にいつてみました。十
国峠に行く観光バスがあるというので、高
い所から下界を眺めてみることにしました。
が、何と、その日、わたしの心を揺さぶつ
たのは、見下ろすことではなく、見下ろさ
れることだったのです。途中で寄った来宮
神社の大楠。二千年の樹齢を持つその木は
天高く緑の葉を茂らせ、太陽の光が葉を通
して降ってくるのです。涙が出てきました。
圧倒されたのです。

わたしの息子は22歳になります。定時制
の四年生。昨年も四年生でした。来年の三

月も卒業しそうにありません。それがどう
した？ まだ22年じゃないか。二千年に比
べたら、小さい、小さい——言葉に出した
らこうなりますが、言い表せない感動で、
わたしは楠に見下ろされていました。

何日かたって、わたしは「登校拒否、出
社拒否」というシンポジウムに出てみまし
た。シンポジウムの言葉は沈着、冷静、客
観的、分析的であり、それはそれで面白か
ったのですが、ワラにもすがりたい気持ち
でやってきた父母たちにとって、「登校拒
否は日本の管理的な社会構造に対する、大
人に代わっての拒否でアル」などというシ
ンポジウムの言葉は、心を明るくさせてく
れるものではありません。

二百人近い客に向かって、わたしは発言
することにしました。

「わたしは50年前、ズルヤスミをして、小

学校を落第したこの道の大先輩であります」
会場には笑いがおこりました。でも、わたしの原体験（これはマジな話です）を話すには、時間がまったく足りません。そこでわたしは熱海の楠の話をすることにしました。

笑ってくれた人々の顔には、いつの間にか涙が光っていました。あちらの顔も、こちらの顔も泣いているのです。

大変な時代に生きているという実感がわたしを締めつけました。罪を一身に背負ったかのような血縁の涙は、この国の閉ざされた状況を示すものでした。

吉廣紀代子さんの「血縁を超えた共同生活の表現に向けて」という6月号の文は、そういうわたしをうなずかせてくれるものでした。

* * *

福井 安川早苗

今日、Weが届きました。集中して読ん

でしまいました。何というのか、自分よりもどした、というのか、いろいろ頭の中でゴチャゴチャしていたことが、ふっと抜けた、というか整理できたというか……。最近、なかなか本を読む気にもなれずいたのですが、読むとやっぱりWeは元気の素だなあ、と思わずにはいられません。

「複眼で見る」のインタビュや、「オホーツクのこと」、「アマラとカマラ」のこと、「家族についての子どもたちの声」……「読者のひろば」も今月はたくさんあっておもしろい。まだ全部読んでないけど若竹さんの福祉のところも毎月おもしろい。浅井さんの実践も……。私も少しずつ前に進んでいこう、肩に力を入れずに……と思いました。

今年度は養護学校小学部一年生のクラスの担当で、とにかく毎日バタバタして、体がかりが疲れる毎日でした。やっと少し落ち着いたかな、という感じ。また、26歳

になつたら、まわりで結婚する人が増え、それがけっこうプレッシャーだったりして……。そんな毎日だったので、We読んで元気が出ました。（ちょっとくどいかな？）フォーラムのチラシを見ながら、夏だなあ、とワクワクしています。

'93夏季フォーラム 締め切りが迫っています。

参加費は郵便局の備え付け用紙をご利用の上、下記の口座にお振り込みください。本誌の購読料及びウイの会の会費振替口座とは異なりますので、お間違えのないよう、お早めにお申し込みください。

【申込先】フォーラム事務局；武田秀夫

〒198 東京都青梅市野上665-18

Tel/Fax 0428-31-6947

郵便振替 東京9-713270「1993・ウイ・フォーラム」

◆昨日治療した歯が疼く。多分治療の後のヨガのレッスんがまずかったのだろう。体をリラックスさせるつもりが、却って首や肩を緊張させたようだ。私の場合、一生懸命になり過ぎて失敗することが多い。期末テスト前の息子たちに食事を作るのがやっと…。テスト前は何かと口うるさい私が、“静かなる母”なので息子たちは内心ホッとしているのかも。ベタベタと湿布を貼りながら、この痛みは、黙っていなさいというサインかも、なんて考えてしまう私は変なのかな。(有坂)

●『森と牧場のある学校』を読んで、子どもが生き生きとする環境づくりがこんなに大切なんだ、と驚いた。

娘も、朝御飯を食べると「早く行こうよ」と言って、待ち切れずに外で遊び出す。彼女の保育園にも、たくさんの木と、動物たちと、池や小川がある。光が眩しく、風が心地よい。一步足を踏み入れると、私までがワクワクしてしまう、不思議な空間。共に環境を作っていく……なんておこがましくて言えないけれど、元気だけ分けてもらっている。(中村)

♥単身赴任から戻った夫は、生活全般を家族のバックアップもなく、さりとて重荷もなく、“一人”に戻って生活することで、仕事以外の感性を取り戻したように思う。私が日常感じて、あまり伝わることのなかった、とりとめのない思いが実に自然に夫に伝わるのを感じて驚いた。仕事優先の考えにもとづく単身赴任に、予想外のおまけがついていたのだ。

“人生すべて塞翁が馬”？ それともいっそ、“かわいい夫には旅をさせろ”というべきだろうか。(石海)

◆東京での3回目の梅雨です。九州の梅雨とは何か違うものを感じます。

同じ日本に育っても、気候の違いによって感じ方も違ってきます。まして違う民族文化の中で育った者が、共に生きていくことは難しい。小沢有作さんの「共生の教育は、その人を好きになって、その背景をもっと知りたいと思うことだ」という言葉に胸を打たれ、今月号を担当しようと思いました。新しい人と出会い、その中から多くの本にも出会いました。やってよかった。(石橋)

♣子どもたちが保育園に通っていた頃、通り道だった神社の境内は樹木が鬱蒼と茂る格好の遊び場だった。ある晩秋の朝の出来事が今でも鮮明に思い浮かぶ。いつものように急いで階段を駆け上がった息子が「お母さん…」と、言ったり動かなくなった。颯と吹いた一陣の風に大イチョウの葉が黄金色にきらきらと光りながら天から降ってきたのだ。それはまさに天啓としか言いようのない光景であった。日本中が「森と牧場のある学校」になったらいいのに……。(河村)

★いつの頃からだろう。理路整然として隙のない文章ほど、読んだあとで忘れてしまうことが多いのに気づいたのは…。頭の表層だけで納得して読めてしまうからなのか。引っかけられないから通過してしまうのか。頭を無用にクシャクシャと疲れさせることなしに、潜在意識にスッと入ってくる、あるいは引っかけってくる、そういう話し方や書き方ができれば、というのが、目下の私の夢。こう書いてしまうと、なにやら「催眠術」の世界めいてくるけれど……。(稲邑)

くらしと教育をつなぐ-We

Vol. 2 No. 4 1993年7月15日発行

定価600円(本体583円)

年間購読料/定価6500円(送料共)

発行/Weの会 編集/稲邑恭子 河村ふみ 印刷所/(有)イー・エム・ビー

〒225 神奈川県横浜市緑区市が尾町1161-8

共学舎内 ☎・FAX 045(974)3101

郵便振替 東京3-754314 WE編集室

三菱銀行 大久保支店 普0264724

〒102 千代田区飯田郡2 5 2

好評発売中

へからだぐとマことば のレッスンスム入門

地球市民として自分を耕す



■三好哲司 ストレスだらけの時代の中で、こわばりちぢこまっているからだ・ことば・こころをのびのびとひらく楽しいレッスン。 1800円

センターリング・ブック

- ヘンドリックス他/手塚郁恵訳 自分を中心に気づき、感受性・想像力・精神・靈性を成長させる。 1648円
- やさしいサイコシンセシス
- フューギット/平松十手塚訳 意志・選択力、豊かな感情、自尊心、内なる知恵を育てるワークの本。 2100円
- 喜びの教育 サイコシンセシス教育入門
- ホイットモア/手塚郁恵訳 子どもと親と教師と一緒に成長する喜びを味わう、すばらしいワーク集。 3200円

▼定価は消費税込み

〒101 東京都千代田区外神田2-18-6
電話(03)32555961-1 春秋社

農文協

〒107 東京都港区赤坂7-6-1
☎03(3585)1141

●内容見本呈

●農文協の教科・教育実践書!

「雑」には愛がいっぱい

名取弘文著 雑穀坂本淳男 雑魚 水口恵哉 雑菌 小泉武夫 雑煮 小林カツ代 雑の専門家による個性と多様性の価値探求 *1600円

子どもに話そう原子力発電所
名取弘文著 原発は必要悪? 「原発」の時代を担う子どもたちはどう考えているのか 原発を正面からとらえた授業記録 *1350円

多摩川はつらいよ

小菅盛平著 近くには川があれば役立ちます。多摩川を舞台に、魚、野鳥、水の汚れ等を通して、自然と社会を眺めるみて授業化 *1600円

学校は地域に何ができるか
渋谷忠男著 米飯給食実践校・京都川上小学校の地域ぐるみの記録
生涯学習時代に必要な、地域の教育力が改めて新鮮 *1340円

●からだで感じる地球のいのち



絵とき

土と遊ぼう



松尾嘉郎・奥藤壽子著 かわいイラスト高敏のトロ遊び62集 五感をいっはい使って、さあ!トロ遊び/生活科にも良い! *1300円

自然ののりあいを考える教育情報誌 ●定期購読受付中
自然教育活動 ●自然とののりあいを
考える情報誌

自然教育活動 ●自然とののりあいを
考える情報誌

技術教室 ●暮らしをつくる雑誌
産業教育研究連盟編集 技術・家庭科はかりか、手づくり物づくりに役立つと好評! A5判 月刊 *650円 年間購読料 7800円 丁込

保健室 ●いのちをみつめる保健の雑誌
全国養護教諭サークル協議会編集 性教育からたどる保健拒否などの役立つ実践 A5判 隔月刊 *600円 年間購読料 4300円 丁込



くらしと教育をつなぐWe 1993年7月15日発行 第2巻第4号

定価600円(本体583円 年間購読6500円送料共)